和文概要

太宰春臺『倭讀要領』譯注（二）

坂本具償[*1]

財木美樹[*2]

An Annotated Modern Japanese Translation of "Wadoku-Yoryo"by Dazai Shuntai (2)

Tomotsugu SAKAMOTO

Miki ZAIKI

本稿は、太宰春臺『倭讀要領』中に対して訳註を施したものである。『倭讀要領』は漢文の訓読・音韻・発音などの基礎知識について述べた書で、今日でもなお漢文学習のために有用な書であるが、昨今は他の江戸時代の著作と同様に読まれることが少ないように思われる。それは原本が手に入りにくいこともあるが、江戸時代のもの、旧字体、片仮名書き、句点しか施されていないなどという理由で敬遠する人が多いからであろう。そこで本稿では、現代語訳を作成するとともに、漢文に興味を有する人、漢文を学ぶ初学者に原文でも読みやすいように平仮名で校訂し、句読を施したテキストを附した。

キーワード

太宰春臺　倭読　倭音　倭語

*1香川高等専門学校名誉教授

*2比治山大学非常勤講師

太宰春臺『倭讀要領』譯註（二）

坂本具償
財木美樹

はじめに

太宰春臺『倭讀要領』は漢文の訓読・音韻・発音などの基礎知識について述べた書であるが、昨今は他の江戸時代の著作と同様に読まれることが少ないように思われる。それは原本が手に入りにくいこともあるが、片仮名で書かれているということもひとつの要因になっていると思われる。そこで現代語訳を作成するとともに、漢文に興味を有する人、漢文を学ぶ初学者に原文でも読みやすいように平仮名で校訂したテキストを作成した。今回はその巻中に対して譯註を施したものである。

版本

・『倭讀要領』三巻　享保十三年（一七二八）

影印本

・『漢語文典叢書』第三巻　及古書院　一九八九・三
・倭讀要領　勉誠社文庫66　一九七九・八

凡例

一、本訳註は太宰春臺『倭讀要領』巻中に対して訳註を施したものである。
一、本訳註は『倭讀要領』享保十三年刊を底本とし、現代語訳と原文（平假名校訂）から成り立つ。

『倭讀要領』巻中（現代語訳）

中巻

倭語の正誤第八
倭読の正誤第九
読書法第十

倭讀要領巻中

信陽太宰純德夫撰

倭語の正誤

倭語は萬葉集を基本として、それ以外の古書を参考とし、雅と俗の区別を理解し、古今の異同をわきまえなければならない。名物は和名集を基本とする。しかしわが国の古書も簡冊がとても多いので、初学の士が閲覧しつくすことはできない。とりあえず最初はその時の師の教えにしたがって習読しなければならない。その中には近世あやまって読み、字義を失したものがある。今そのはっきりしたものをあげて、初学に示す。

猪　豬（ちょ）と同じ。猪といい、豕（し）というが、同じ物である。倭語では「ゐ」という。俗に「ぶた」というのがそれである。この字を「ゐのしし」といい、「ゐのこ」というのは、いづれも非である。「ゐのしし」は野猪（やちょ）であり、「ゐのこ」は豚（とん）である。小さな豕を「豚」という。猪・豕の二字はただ「ゐ」と読まなければならない。

蒲　倭語では「かま」という。清（す）んで読まなければならない。俗に「がま」と濁（にご）って読む。朗詠集の「刑鞭蒲腐螢空去」（刑鞭蒲腐て螢空しく去る）①という句は清んで読む習わしである。さらに近江の国の蒲生郡を「かまふ」というのも、

清んで読む。さらに源範頼を「蒲御曹子」②と称し、蒲の字を「かば」と読む。そもそも書を読む場合は「かま」と読まなければならない。

①『和漢朗詠集』巻下、帝王「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不驚」（刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る、諫鼓苔深くして鳥驚かず）。

②源範頼は源義朝の子で、源頼朝の弟、源義經の兄である。遠江国蒲で成人したので、蒲御曹子と呼ばれた。

豚 犉・豘と同じ。説文に「小豕なり」①と註するので、「ゐのこ」と読む。倭語はぴったりする。豕・猪の二字を「ゐのこ」と読むのはあやまりである。

①『説文』「豚、小豕也。从古文豕、从又持肉以給祠祀也」。

圓 倭語では「まとか」という。「と」の字を濁って「まどか」と読むのはあやまりである。

裳 衣を「ころも」といい、裳を「も」という。俗儒が「もすそ」と読むのは非である。「もすそ」は、裾の字、裔の字、齎の字であり、裳は「もすそ」ではない。

豕 すなわち猪である。俗にいう「ぶた」である。「ゐ」と読まなければならず、「ゐのこ」と読んではならない。「ゐのこ」は豚である。前の猪の字の下に見える。

灑 洒と同じ。「そそく」と清んで読まなければならない。「く」の字を濁って「そそぐ」というのはあやまりである。

乃 廼と同じ。助辞として用いたところでは「すなはち」と読まなければならない。それを俗儒が「いまし」と読むのはあやまりである。「いまし」は、わが国の古言で「なんぢ」のことを「いまし」という。乃の字は汝と訓じるので、古書で乃の字を「いまし」と読んでいる場合は、かならず汝の意味である。乃の字だけではなく、汝の字も「いまし」と読む。さらに「いましい」と読むものがあるが、とりわけ鄙俗である。

槳 この字を「かぢ」と読むのはあやまりである。字彙に「縦なるを櫓と曰ひ、横なるを槳と曰ふ」①と註する。槳は櫓の類であり、船の傍にあるものを「槳」という。櫓の字に倭訓はないので、槳の字にも倭訓はない。もししいて倭語でいうのであれば、「さほ」というべきであるが、「さほ」といえば、櫂・篙と混乱する。「櫂」は棹と同じで、木のさおである。通常「かい」というのがそれである。「篙」は竹のさおである。櫂の字を「さほ」と読むのも、篙から移行してきた倭語である。槳は櫓の類であるので、しいて倭訓を施すのはむつかしく、音で読んだほうがよい。

①『字彙』辰集「子兩切、音奬。縦曰櫓、横曰槳」。

貢 倭語では「みつき」という。清んで読まなければならない。「き」の字を濁って「みつぎ」と読むのはあやまりである。

避 「さくる」と読まなければならない。「さくる」とは、ふつうにいう「よける」という意味である。自分からよけてのきさることである。俗儒が「さる」と読むのは非である。「さる」と読むのは辟の字である。辟の字には多音多義がある。そのうち、音が壁であるものは、「除なり、屏なり」①と註して、驅・除・屏・去の意味である。本草に「雄黄、邪を辟る」②、「犀角、寒を辟る」③という類がそれである。倭語では「さる」と読み、「しりぞくる」と読む。音が闢であるものは、闢と同じ。孟子に「土地を辟く」④、「行きて人を辟く」⑤という類がそれである。倭語では「ひらく」と読む。壁と闢は、倭音は同じであるが、華音は別である。音が避であるものは、避と同じ。経伝に「去聲」と註する⑥が、避と同じ。論語に「賢者、世を辟く」⑥というのがそれである。「さくる」と読む。辟の字のこの三音の意味はまぎれやすい。よくよく辨別しなければならない。俗儒が音義をよく理解せずに、一概に「さる」と読むのはあやまりである。

①『字彙』酉集「辟、除也、屏也」。

②『本草綱目』石部第九巻雄黄「權曰、雄黄能敎百毒、辟百邪、殺蠱毒」。

③『本草綱目』獸部第五十一巻犀「時珍曰、……又山海經有白犀、白色。開元遺事有辟寒犀、其色如金、交趾所貢、冬月暖氣襲人」。

④『孟子』梁惠王上「曰、然則王之所大欲可知已、欲辟土地、朝秦楚、莅中國而撫四夷也」。

⑤『孟子』離婁下「君子平其政、行辟人可也、焉得人人而濟之」。

⑥『論語』憲問「子曰、賢者辟世。其次辟地。其次辟色。其次辟言。子曰、作者七人矣」、朱熹『論語集注』「辟、去聲、下同」。

彘

「豕なり」①と註する。豕の別名である。「ゐ」と読まなければならず、「ゐのこ」と読んではならない。

①『説文解字』「彘、豕也。後躧廢謂之彘、从彑从二匕」。

背

「身の北を背と曰ふ」①。身体のうしろ側である。倭語で「せ」というのがそれである。俗儒が「せなか」と読むのはあやまりである。脊の字を「せなか」と読む。「せなか」とは、背中の意味である。膂は脊骨である。「せぼね」と読む。

①『字彙』未集「背、邦妹切、音輩、身北曰背」。

卜

龜を灼くことを「卜」といい、蓍を揲ることを「筮」という。「卜す」「筮す」と音で読まなければならず、「うらなふ」と読んではならない。占の字を「うらなふ」と読む。「うらなふ」というのは卜・筮の両字に通じる。ひろいことばである。

躍

「をどる」と読む。古い読みでこの字を「ほどはしる」と読んでいるのは非である。迸の字を「ほどはしる」と読む。迸は「走逸なり」①と註して、たとえば癰腫のところを押せば膿血が走り出る、これを「ほどはしる」という。「躍」は下からおどりあがることである。水が撃れておどりあがることも「躍」である。迸と躍は同じ意味ではない。あやまって訓じてはならない。

①『字彙』酉集「迸、比孟切、伯、去聲、走逸也」。

迫

「せまる」と読まなければならない。「せむる」と読んではならない。「せまる」というのは、近づくという意味である。逼の字も「せまる」と読む。逼・迫の二字は同じ意味である。

食

この字はもともと入聲であり、職の韻にはいる。漢音ショク、呉音ジキ。「くらふ」であり、「くひもの」である。さらに去聲寘の韻にはいる。倭音シ。「飯なり」①と註して、「いひ」のことである。「いひ」はめしである。さらに「くらはしむる」と読む。くわせることである。この時、飼の字と通じる。さらに「やしなふ」と読む。くわせるという意味である。通常飲食というのは、「のみくらう」という意味であり、「のみもの」「くいもの」という意味でもあるので、食の字を入聲に読む。俗儒が「いんしい」と読むのはあやまりである。

①『周禮』天官・膳夫「膳夫、掌王之食飲膳羞、以養王及后世子」、鄭注「食、飯也」。

楫

檝と同じ。短い棹である。橈ともいう。「棹」はかいであり、「楫」は短いかいである。書物の中では「さほ」と読まなければならない。俗儒が「かぢ」と読むのはあやまりである。「かぢ」は柁である。橈もこれと同じで、「かぢ」と読んではならない。

夾

「はさむ」と読まなければならない。「路を夾む」「岸を夾む」というのは、両側にあるという意味である。「夾み攻む」「夾み撃つ」というのは、両側から攻撃することである。「さしはさむ」と読んではならない。挾の字を「さしはさむ」と読む。挾は挾持という意味である。

以上、字義を失している倭語はおおよそこの類である。これ以外はつぶさに述べるのがむつかしい。学ぶものが一心に尋思すれば、是非はおのづからはっきりする。さらに童蒙は書を読むにあたって、倭語のテニヲハにまったく注意を払わない。ただその時の師の口授にしたがって読み習わすだけなので、あやまりを犯すことが多い。そもそも倭語はテニヲハを用いることによってその意味が完結するので、テニヲハをあやまれば、文章の筋道をそこない、結局その大義が大きく食いちがってしまう、決して些細なことではない。だから今の学ぶものがもし華音の読みをおこなうのであれば、テニヲハを議論する必要はないが、倭語の読みで読む場合はテニヲハを用いないわけにはいかないのである。深くこだわる必要はないが、よく深く考

えずにおろそかにしてはならない。

倭読の正誤

近世の俗儒が論語を読むとき、「其如示諸斯乎」①の句を「それ斯を示るが如きか」と読み、「諸」の字を読まない。（しかし）上に「其の説を知れる者の天下に於るや」とあり、「諸」の字は上句の「天下」を指している。禘の説を知る者が天下を治めるのはなんらむつかしいことはなく、四海九州を掌の上に置いて、一目で視るようなものであろうという意味である。だからこの句を「それ諸を斯に示るが如けんか」と読まなければならない。そもそも「諸」の字を句中に置く場合は「之」の字の意味であり、指すものがある詞であることが多く、一字ものこさずに読まなければならない。「其」の字は期待する詞であり、事をおしはかっていうときに置く字である。上に「其」とあるところは、下で「云云せん」「云云ならん」と読まなければならない。俗儒にはこのことを知らないものが多い。中庸にも「治國其如示諸掌乎」（國を治むるは其れ諸を掌に示るが如けんか）②という語があり、これに准じて読まなければならない。

①『論語』八佾「或問禘之説。子曰、不知也。知其説者之於天下也、其如示諸斯乎、指其掌」。

②『禮記』中庸「郊社之禮、所以事上帝也。宗廟之禮、所以祀乎其先也。明乎郊社之禮、禘嘗之義、治國其如示諸掌乎」。

○「遂事不諫」①の句を「とげんじことをば諫めず」と読むが、「とげんじ」というテニヲハは非である。「とげんじ」は「とげにし」である。「にし」というのは、倭語では完了する詞であり、「とげにし」とは「とげおはりし」という詞である。今本文に「遂事」というのは、朱註の意では「事いまだ成就せざれども、其の勢ひ已むことあたはざる」①ことをいう。だから「遂事」の二字を、倭語では「とぐべきことは」と読まなければならない。読むものがこのことを考えず、上の句を「なりんじ事をば」と読んだながれで、この句を「とげんじ事をば」と読んだのであり、これはテニヲハを理解していない。今この三句の上の二字を、倭語を用いずに「成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めず」と読む。（こう読んでも）簡潔でその意味を失していない。

①『論語』八佾「哀公問社於宰我。宰我對曰、夏后氏以松。殷人以柏。周人以栗。曰使民戰栗。子聞之、曰、成事不説、遂事不諫、既往不咎」、朱熹『論語集注』「遂事謂事未成而勢不能已者」。

○「不以其道得之」①の句を「其の道を以てせずしてこれを得れば」と読むのはあやまりである。この「不」の字は「非」の字と同じ。富貴は人が好みねがうことであるが、富貴になるべき正しい方法によって手に入れるのでなければそこに安住しない、貧賤は人がにくみきらうことであるが、貧賤になってしかるべき理由によって貧賤になるのでなければそれを避けない、という意味である。「不」の字は「得之」までかかり、「不處」「不去」の「不」の字と呼応している。だから上の句を「其の道を以てこれを得ざれば」と読まなければならない。「不」の字を「あらざれば」と読んでもよい。そもそも「不」の字には「非」の字の意味である場合がある。さらに「無」の字、「非」「匪」の字にも「不」の字の意味である場合がある。「夙夜匪解」（夙夜解らず）②、「彼交匪敖」（彼の交り敖らず）③というのも、「匪」の字はいづれも「不」の字の意味である。「あらず」と読んではならない。

①『論語』里仁「子曰、富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是、顚沛必於是」。

②『詩經』大雅・烝民「肅肅王命、仲山甫將之、邦國若否、仲山甫明之。既明且哲、以保其身。夙夜匪解、以事一人」。

③『詩經』小雅・甫田之什・桑扈「兕觥其觩、旨酒思柔。彼交匪敖、萬福來求」。

○「造次必於是、顚沛必於是」①を「造次にも」「顚沛にも」と読むのはあやまりである。仁者は、造次のときも顚沛のときもかならず仁の上にて造次顚沛するという

意味である。「造次も」「顚沛も」と読まなければならない。

①『論語』里仁「子曰、富與貴、是人之所欲也。不以其道得之、不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道得之、不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁。造次必於是、顚沛必於是」。

○「吾亦欲無加諸人」①を「吾も亦人に加ふることなしとほつす」と読むが、「なしとほつす」というテニヲハはよくない。「なからんことをほつす」と読まなければならない。さらに二つの「諸」の字も「これを」と読まなければならない。俗儒は「諸」の字をすべて読まない。

①『論語』公冶長「子貢曰、我不欲人之加諸我也。吾亦欲無加諸人。子曰、賜也、非爾所及」。

○「夫子之言性與天道」①を「夫子のこと」と読むのはあやまりである。この八字は八字で一句である。「夫子の性と天道とをのたまふは」と読まなければならない。俗儒は句読をわかっておらず、「言」の字が活字〔動詞〕②であることも知らない。

①『論語』公冶長「子貢曰、夫子之文章、可得而聞也。夫子之言性與天道、不可得而聞也」。

②『馬氏文通』正名・界説「動字と活字と別無し、活字と曰はずして動字と曰ふは、活字の對待する者を死字と曰ひ、未だ用に便ならず、動字の對待するの靜字と爲すの愈れるに若かざればなり」。

○「堯舜其猶病諸」①を「堯舜もそれなをやめり」と読むのはあやまりである。「それなをやまんか」と読まなければならない。そもそも句末にある「諸」の字は、いづれも疑問の詞である。小爾雅に「諸は之乎なり」②とあり、「之乎」の二字を合わせた意味である。「山川其舍諸」③は「それこれをすてんや」である。「有諸」④は「これありや」である。「韞匵而藏諸」⑤は「これをかくさんや」であり、「求善賈而沽諸」⑤は「これをうらんや」である。「吾得而食諸」⑥は「これをくらはんや」である。「堯舜其猶病諸（それなをやまんか）」とは、子貢が問うたことは、仁人だけが悩むことではなく、(仁は) 聖人が天下を治められた上でなしとげられることであるので、古の堯や舜でさえもおそらくこのことを悩みとされたのではないだろうか、という意味である。下文の子路に答えた語もこの意味である⑦。「其」の字は「山川其舍諸」の「其」と同じで、いづれも期待の詞である。だから上に「其」の字があり、下に「諸」の字があるのは、いづれもおしはかっていう詞である。ところが「其れなをやめり」と読めば、決定する詞となり、上の「それ」というテニヲハと合わない。

①『論語』雍也「子貢曰、如有博施於民、而能濟衆、何如。可謂仁矣。子曰、何事於仁、必也聖乎。堯舜其猶病諸。夫仁者、己欲立而立人、己欲達而達人、能近取譬。可謂仁之方也已」。

②『小爾雅』廣訓「諸、之乎也」。

③『論語』雍也「子謂仲弓曰、犂牛之子、騂且角。雖欲勿用、山川其舍諸」。

④『論語』述而「子疾病。子路請禱。子曰、有諸。子路對曰、有之」。

『論語』子路「定公問一言而可以興邦。有諸。孔子對曰、言不可以若是其幾也。人之言曰、爲君難。爲臣不易。如知爲君之難也。不幾乎一言而興邦乎。曰、一言而喪邦。有諸」。

⑤『論語』子罕「子貢曰、有美玉於斯。韞匵而藏諸、求善賈而沽諸。子曰、沽之哉。沽之哉。我待賈者也」。

⑥『論語』顏淵「齊景公問政於孔子。孔子對曰、君君、臣臣、父父、子子。公曰、善哉。信如君不君、臣不臣、父不父、子不子。雖有粟。吾得而食諸」。

⑦『論語』憲問「子路問君子。子曰、脩己以敬。曰、如斯而已乎。曰、脩己以安人。曰、如斯而已乎。曰、脩己以安百姓。脩己以安百姓、堯舜其猶病諸」。

○「久矣吾不復夢見周公」①の「夢」の字を「ゆめにだも」と読むのはまったく非である。孔子は若い時から周公をお慕いもうしあげていたので、周公を時々夢に見ていたが、老衰がひどくなって、いつのころからか二度と周公を夢にみなくなったことを歎いて、このようにおっしゃたのである。だからこの句を倭語で読むのであ

れば、「久しく吾れまた夢に周公を見ず」と読まなければならない。「夢にだも」と読めば、孔子は若い時は周公に親見されていたが、今は夢でもお目にかかれないということになる。「親見」とは実際に会うことである。五百年前の周公に、どうして孔子が実際に会うことができようか、ほんとにおかしなことである。

①『論語』述而「子曰、甚矣吾衰也、久矣吾不復夢見周公」。

○「不憤不啓、不悱不發」①を「憤せずんば啓せず、悱せずんば發せず」と読むのは、テニヲハを失している。「憤せざれば」「悱せざれば」と読まなければならない。「憤せずんば」「悱せずんば」と読むのであれば、「啓せじ」「發せじ」と読まなければならない。あるいは「啓せざれ」「發せざれ」と読んでもよい。さもなければテニヲハが合わない。さらに最近のある儒師の読みでは「憤せざる啓せず、悱せざる發せず」と読む。そもそも（彼らは）「則」の字があるところには「れば」というテニヲハを附け、「則」の字がないところには「れば」というテニヲハを附けないというのが家法であって、意味を議論せずに「則」の字があるかないかだけでしか判断しない。今この語などは、句中に「則」の字がないので、「憤せざる」「悱せざる」と読んで、「れば」というテニヲハを用いないのである。これは文法に明らかでなく、古人が文章を書くのに活法〔臨機応変な方法〕があることを理解していない。頑固の極みであり、笑止千万である。

①『論語』述而「子曰、不憤不啓。不悱不發。舉一隅不以三隅反、則不復也」。

○「不在其位、不謀其政」①を「其の位にあらずんば、其の政を謀らず」と読むのも、テニヲハを失している。「其の位にあらざれば」と読まなければならない。さらに孟子の「不奪不饜」②を「うばはずんばあかず」と読むのもテニヲハの例ではない。「うばはずんばあかじ」、あるいは「うばはざればあかず」と読まなければならない。先輩はテニヲハをわかっていないので、このように読んだのである。

①『論語』憲問「子曰、不在其位、不謀其政。曾子曰、君子思不出其位」

②『孟子』梁惠王上「苟爲後義而先利、不奪不饜。未有仁而遺其親者也」。

○「韞匵而藏諸、求善賈而沽諸」①を「匵に韞めて藏したり。善賈を求めて沽めや」と読むのはあやまりである。「かくさんや」「うらんや」と読まなければならない。この二句は、子貢が両端を設けて問うたのである。だから二句の末にある「諸」の字は疑問の詞である。「沽之哉」①を「うらめや」と読むのもあやまりである。「哉」は感嘆の詞である。孔子の意は、美玉であれば高い値段になるのを待ってうるべきことは当然のことなので、かならずうろうということを強くいおうとして、「これを沽らんかな、これを沽らんかな」と重ねておっしゃったのである。この「哉」の字は、左傳に「可哉」（可なるかな）②、「諾哉」（諾なるかな）③、「與君王哉」（君王に與へんかな）④、「畏君王哉」（君王を畏れんかな）⑤といい、孟子に「膾炙哉」（膾炙なるかな）⑥という「哉」の字と同じである。いづれも人の言葉に強く応じる詞である。しかし「うらめや」と読むときには疑問の詞となり、返答の語にはならない。子貢が「沽らんや」と問い、（孔子が）「これを沽らんかな」と答えられているのに、「沽諸」と「沽之哉」をいづれも「うらめや」と読んでおり、これでは問いと答えが倭語では混同してしまっている。先輩はこのように文義をよくわかっていない。

①『論語』子罕「子貢曰、有美玉於斯。韞匵而藏諸。求善賈而沽諸。子曰、沽之哉、沽之哉。我待賈者也」。

②『左傳』宣公十一年「對曰、猶可辭乎。王曰、可哉」。

③『左傳』哀公十六年「曰、請三之後有罪殺之。公曰、諾哉」。

④『左傳』昭公十二年「對曰、與君王哉。周不愛鼎、鄭敢愛田」。

⑤『左傳』昭公十二年「對曰、畏君王哉。是四國者、專足畏也」。

⑥『孟子』盡心下「曾皙嗜羊棗、而曾子不忍食羊棗。公孫丑問曰、膾炙與羊棗孰美。孟子曰、膾炙哉」。

○「吾以子爲異之問、曾由與求之問」①を「吾、なんぢを以て異なる問とす、曾ち由と求とが問なり」と読むのは非である。「吾、子を以て異を問はんとす、曾ち由と求とを問ふ」と読まなければならない。「以爲」の二字は、中間に字を置いても「おもへらく」という意味である。夫子が答えられた意味は、わたしはおまえがな

にか物を問おうとするを見て、かならず他の事を問うだろうとおもった、しかし意外にも由と求との事を問うたのはなぜだ、ということである。そもそも上にあるべき字を下に置く場合、その中間に「之」の字を置くのが文法である。ここの二つの「之」の字がそれである。先輩は文法をよくわかっていない。

①『論語』先進「季子然問仲由冉求可謂大臣與。子曰、吾以子爲異之問。曾由與求之問。所謂大臣者、以道事君。不可則止。今由與求也、可謂具臣矣。曰、然則從之者與。子曰、弑父與君、亦不從也」。

○「子帥以正」①を「子ひきいて以てたださば」と読むのは非である。「子ひきゆるに正を以てせば」と読まなければならない。「帥以正」は、正しいことをもちいてひきいるという意味であり、文法にのっとればこのように書く。「堯舜帥天下以仁、桀紂帥天下以暴」（堯舜、天下を帥るに仁を以てす、桀紂、天下を帥るに暴を以てす）②というのと同じ字法である。（どうしてこれを）「堯舜、天下をひきいて以て仁す、桀紂、天下をひきいて以て暴す」と読んでよいものであろうか。先輩は字法を理解していない。

①『論語』顔淵「季康子問政於孔子。孔子對曰、政者、正也。子帥以正、孰敢不正」。

②『禮記』大學「堯舜帥天下以仁、而民從之、桀紂帥天下以暴、而民從之」。

○「草上之風」①を「草に風をくはふれば」と読むのは非である。「草これに風をくはふれば」と読まなければならない。草というものはこれに風をくわえればかならずのべふすものである、という意味である。もしこの文が「上草風」とあれば、「草に風をくはふれば」と読まなければならないが、ここには「草上之風」とあり、「之」の字は草を指していっているので、これを読まずに捨て置いてはならない。

①『論語』顔淵「君子之德、風。小人之德、草。草上之風必偃」。

○「選於衆」①を「衆をゑらんで」と読むのは非である。「衆にゑらんで」と読まなければならない。「於」の字を置いた意味は、衆をえらぶということではなく、衆人の中から選び出して皐陶・伊尹を推挙した、ということである。

①『論語』顔淵「子夏曰、富哉言乎。舜有天下、選於衆、舉皐陶。不仁者遠矣。湯有天下、選於衆、舉伊尹。不仁者遠矣」。

○「鄕人皆好之何如」「鄕人皆惡之何如」①を「鄕人に皆よみんぜられればいかん」「鄕人に皆にくみんぜられればいかん」と読むのは非である。「鄕人皆これをよみせばいかん」「鄕人皆これをにくまばいかん」と読まなければならない。一鄕の人がみなこの人をほめ、みなこの人をにくむというのはいかがでしょうか、という意味ではなく、本文において、ほめられる、にくまれるという意味である。字法ははっきりしている。下文の「不如鄕人之善者好之、其不善者惡之」①も「よき者にはよみんぜられ、其のよからざる者にはにくまれんには」と読むのは非である。「鄕人のよき者これをよみし、其のよからざる者これをにくむにはしかず」と読まなければならない。先輩は「之」の字をまったく読まないので、このようにあやまったのである。これは実は字法をわかっていないことによる。

①『論語』子路「子貢問曰、鄕人皆好之、何如。子曰、未可也。鄕人皆惡之、何如。子曰、未可也。不如鄕人之善者好之、其不善者惡之」。

○「豈若匹夫匹婦之爲諒也、自經於溝瀆而莫之知也」①を「あに匹夫匹婦の諒をするが、みづから溝瀆にくびれて、知らるることなきがごとくならんや」と読むのは非である。「あに匹夫匹婦の諒をする、溝瀆に自經して、これを知ることなきがごとくならんや」と読まなければならない。自身でくびをくくって死ぬことを「自經」という。「これを知ることなき」とは、ほかにこのことを知る人がいないという意味である。後漢書には「莫」の字の上に「人」の字があり②、文義はとりわけ明白であり、「知らるることなき」とは読まない。

①『論語』憲問「子貢曰、管仲非仁者與。桓公殺公子糾。不能死、又相之。子曰、管仲相桓公、霸諸侯、一匡天下。民到于今、受其賜。微管仲、吾其被髪左衽矣。豈若匹夫匹婦之爲諒也、自經於溝瀆而莫之知也」。

②『後漢書』楊李翟應霍爰徐列傳第三十八「昔召忽親死子糾之難、而孔子曰、經於溝瀆、人莫之知」。

○「是栖栖者與、無乃爲佞乎」①を「是れ栖栖する者か、むしろ佞をするか」と読むのは非である。「是れ栖栖たる者か、すなはち佞をすることなからんや」と読まなければならない。微生畝が問うた意味は、孔子は何を行なわれたのか、あくせくといそがしく功名を求める者か、それならば口先うまくへつらうものということにならないだろうか、と非難したのである。「無乃」の二字はいづれもこの意味である。例を考えて帰納すればわかる。俗本のように読めば、二句とも問う語となり、「無乃」の詞の意味を失している。

①『論語』憲問「微生畝謂孔子曰、丘何爲是栖栖者與、無乃爲佞乎。孔子曰、非敢爲佞也。疾固也」。

○「鄙哉硜硜乎、莫己知也、斯已而已矣」①を「いやしいかな硜硜乎として己を知ることなきこと、これ已みなんのみなり」と読むのは非である。「いやしいかな硜硜たること、己を知ることなくは、これ已まんのみ」と読まなければならない。「鄙哉硜硜乎」の五字が一句である。磬の音がカチカチとかたいことをいやしんだのである。上の文の「有心哉擊磬乎」①と句法は同じである。「莫己知也、斯已而已矣」の二句は、孔子がやめることができないのを譏った言葉であり、「硜硜」の字とは関係ない。俗儒が「鄙哉」の二字を「莫己知也」の句までかけ、「硜硜」の二字を「莫己知也」の意味として読んだので、まったく文義を失したのである。これは実は句法をわかっていないからである。

①『論語』憲問「子擊磬於衞。有荷蕢而過孔氏之門者。曰、有心哉擊磬乎。既而曰、鄙哉硜硜乎。莫己知也、斯已而已矣。深則揭、淺則揭。子曰、果哉、末之難矣」

○「君子疾没世而名不稱焉」①、「没世」を「世をおふるまで」と読むのはあやまりである。「世をおへて」と読まなければならない。「終身」は「身をおふるまで」と読み、一生をつくすまでのことをいう。「没世」は身が没したあとのことをいい、「終身」と同じではない。「没」はかくれるという意味であり、「没世」とはこの世にいなくなることをいう。大學に「此れ以て世を没へて忘れざるなり」②というのも、前王がなくなられたあとも、民がいつまでもその徳を忘れないことをいう。この章も、人が一生のうちに功徳を立てることなく、死んだあとにその名が世間に称せられないことが、君子の悩みとするところである、という意味である。俗儒は「没世」と「終身」とを混同して読む。

①『論語』衞靈公「子曰、君子疾没世而名不稱焉」。

②『禮記』大學「詩云、於戲前王不忘。君子賢其賢、而親其親。小人樂其樂、而利其利。此以沒世不忘也」。

○「不學詩無以言」①を「詩を學びずんば、以てものいふことなし」と読むのは、テニヲハを失している。「詩を學びざれば、以てものいふことなし」と読まなければならない。あるいは「詩を學びずんば、以てものいふことなけん」と読んでもよい。下文の「不學禮無以立」もこれに準じる。

①『論語』季氏「陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎。對曰、未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰、學詩乎。對曰、未也。不學詩無以言。鯉退而學詩。他日又獨立。鯉趨而過庭。學禮乎。對曰、未也。曰、不學禮無以立。鯉退而學禮。聞斯二者。陳亢退而喜曰、問一得三。聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也」。

○「不曰堅乎」「不曰白乎」①を「堅きをいはずや」「白きをいはずや」と読むのは非である。「堅しといはずや」「白しといはずや」と読まなければならない。この「曰」の字の意は軽く、「言」の字、「謂」の字の意味ではない。孟子の「何必曰利」②も「何ぞ必ずしも利をいはん」と読むのは非である。「何ぞかならず利といふ」と読まなければならない。梁王がわが国に利益をあたえてくれるのかというのを、孟子が咎めて、どうして王は口を開けばすぐに利益利益とおっしゃるのですか、といったのである。俗儒は「曰」の字と「言」の字の区別がわかっていない。

①『論語』陽貨「子曰、然。有是言也。不曰堅乎、磨而不磷。不曰白乎、涅而不緇。吾豈匏瓜也哉。焉能繫而不食」。

②『孟子』梁惠王上「孟子見梁惠王。王曰、叟、不遠千里而來、亦將有以利吾國乎。孟子對曰、王何必曰利、亦有仁義而已矣」。

○「今也或是之亡也」①を「今はこのなきことあり」と読むのはあやまりである。「今」や或いは是をうしなへり」と読まなければならない。「或」の字に有の意味があるので、「是をうしなふことあり」と読んでもよい。この「亡」の字は、有亡の「亡」ではなく、失亡の「亡」である。もともと「亡是」とあるべきところを「亡」の字を下に置いたので、中間に「之」の字を入れたのである。

①『論語』陽貨「子曰、古者民有三疾。今也或是之亡也。古之狂也肆、今之狂也蕩。古之矜也廉、今之矜也忿戾。古之愚也直、今之愚也詐而已矣」。

○「本之則無如之何」①を「本のすなはちなきことこれをいかん」と読むのはあやまりである。「これを本づくれば、すなはちなきこと、これをいかん」と読まなければならない。「これを本づくる」とはその根本を求めることである。

①『論語』子張「子游曰、子夏之門人小子。當洒掃、應對、進退則可矣。抑末也。本之則無、如之何。子夏聞之、曰、噫、言游過矣。君子之道、孰先傳焉。孰後倦焉。譬諸草木、區以別矣。君子之道、焉可誣也。有始有卒者、其唯聖人乎」。

○「窺見室家之好」①を「室家のよしみをうかがひみる」と読むのはあやまりである。「うかがつて室家のよきを見る」と読まなければならない。「うかがふ」とはのぞくことである。「好」は美好の好であり、「よしみ」とは読まない。「よしみ」と読むのは去聲の時である。「室家の好き」とは、家の中が小ぎれいであることをいう。牆の高さがわづかに肩ほどしかなく、家の造りも狭いので、牆の外に立ってのぞけば、家の中が小ぎれいであることがそのまま見ることができるのである。「牆」はわが国の築地のことである。

①『論語』子張「叔孫武叔語大夫於朝曰、子貢賢於仲尼。子服景伯以告子貢。子貢曰、譬之宮牆。賜之牆也及肩、窺見室家之好。夫子之牆數仞、不得其門而入、不見宗廟之美、百官之富。得其門者或寡矣。夫子之云、不亦宜乎」。

○大學の「視而不見、聽而不聞」①を俗儒が「みれどもみえず、きけどもきこえず」と読むのはあやまりである。「みれどもみず、きけどもきかず」と読まなければならない。「視」はこちらからみることであり、「見」はみえることである。「聽」はこちらからきくことであり、「聞」はきこえることである。目はみる役目なので、物があればかならずみるが、心が他の事にあって、ここの事が目にうつらなければ、太山でさえもみることはできない。耳はきく役目なので、聲があればかならずきくが、心が他の事にあって、ここの事が耳にはいらなければ、雷霆でさえもきくことはできない。「みえず」「きこえず」といえば、むこうからみえず、きこえずという意味となり、本文の意味ではない。

①『禮記』大學「視之而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺」。

○中庸の「失諸正鵠、反求諸其身」①を「正鵠を失すれば、反て其の身に求む」と読むのは非である。「これを正鵠に失すれば、反てこれを其の身に求む」と読まなければならない。二つの「諸」の字は、いづれも「之」の字の意味であり、射の道を指していう。「失諸正鵠」とは、正鵠の的のところに達してはづせば、という意味である。「正鵠を失すれば」と読めば、「諸」の字を置いた意にそむく。

①『禮記』中庸「子曰、射有似乎君子。失諸正鵠、反求諸其身」。

○「妻子好合」①を「妻子よくあへり」と読むのはあやまりである。「好合す」と読まなければならない。「好」は去聲で、和好という意味であり、おたがいに仲良くすることである。「よく」と読んではならない。「よく」と読めば、美好という意味となり、朱註②の本意ではない。俗儒は音註を見ていない。

①『禮記』中庸「君子之道、辟如行遠必自邇、辟如登高必自卑。詩曰、妻子好合、如鼓瑟琴。兄弟既翕、和樂且耽。宜爾室家、樂爾妻帑。子曰、父母其順矣乎」。

②『詩經』小雅・鹿鳴「妻子好合、如鼓瑟琴」、朱注「好、去聲」。

○孟子の「君爲來見也」①を「君來り見ることをす」と読むのはあやまりである。「君ために來り見る」と読まなければならない。樂正子が孟子のことを魯君に告げたので、君はそのためにやって来て孟子にあったということである。「爲」の字は朱註に去聲とあり①、俗儒は音註を見ていない。

①『孟子』梁惠王下「樂正子見孟子、曰、克告於君、君爲來見也。嬖人有臧倉者沮君、君是以不果來也」、集注「爲、去聲」。

○「今言王若易然」①を「今王たること然しやすきがごとしといはば」と読むのは非である。「今王をいふこと易きがごとく然るときは」と読まなければならない。「言」は語ることであり、談論するという意味である。王道は行いやすくないことであると人々はおもっているのに、今孟子が語る王道ははなはだやさしい事のように聞こえるが、そうすると文王なども模範とするに足りないのか、と非難したのである。「王をいふ」とは王道を語ることである。「王たること」と読めば活字〔動詞〕であり、去聲である。この「王」の字は平聲のままであり、「然」はつけ字である。このような「然」の字は孟子の中にたくさんある。

①『孟子』公孫丑上「曰、若是、則弟子之惑滋甚。且以文王之德、百年而後崩、猶未洽於天下、武王、周公繼之、然後大行。今言王若易然、則文王不足法與」。

○「猶可以爲善國」①を「猶ほ以て善をすべき國なり」と読むのは非である。「猶ほ以て善國たるべし」と読まなければならない。俗儒は句法をわかっていない。「善國」は、新國②、平國③、治國④、亂國⑤、樂國⑥、仕國⑦などというのと同じである。

①『孟子』滕文公上「今滕、絶長補短、將五十里也、猶可以爲善國」。

②『禮記』曲禮下「去國三世、爵祿無列於朝、出入無詔於國、唯興之日、從新國之法」。

③『周禮』秋官・大司寇「刑平國、用中典」、鄭注「平國、承平守成之國也」。

④『荀子』富國「其朝廷隆禮、其卿相調議、是治國已」。

⑤『周禮』秋官・大司寇「刑亂國、用重典」。

⑥『詩經』魏風・碩鼠「樂國樂國、爰得我直」。

⑦『孟子』滕文公下「晉國亦仕國也、未嘗聞仕如此其急」。

○「吾爲之範我馳驅」①を「吾これが爲に範してわれ馳驅すれば」と読むのは非である。「吾これが爲にわが馳驅を範すれば」と読まなければならない。わたしが法にかなった正しい走らせ方をすれば、という意味である。

①『孟子』滕文公下「良不可、曰、吾爲之範我馳驅、終日不獲一、爲之詭遇、一朝而獲十」。

○「其妻妾不羞也」①を「其の妻妾をはぢず」と読むのは非である。「其の妻妾を」という「を」のテニヲハを取り去らなければならない。この六字は下の「而不相泣者幾希矣」の八字につづけて一句となっている。「者幾希矣」の四字は「其妻妾」より以下を承ける。世間の人が富貴利達を求めるやり方は、すべてあの齊人と異なるところはないので、その妻妾であるものがこれを見て、こっそり恥じて泣かないものはまれである、ということである。「はぢず」という羞ぢるは、妻妾が羞ぢるということである。「羞」はおもはゆいということであり、人に面をむけがたいという意味である。先輩は句法をわかっておらず、註の意味を理解していないので、このようにあやまったのである。

①『孟子』離婁下「由君子觀之、則人之所以求富貴利達者、其妻妾不羞也、而不相泣者幾希矣」。

○「舜避堯之子於南河之南」①を「舜、堯の子に南河の南にさる」と読むのは非である。「堯の子を南河の南にさく」と読まなければならない。「さくる」とは、よけてその場所をはずすという意味である。「堯の子に」という「に」のテニヲハはあやまっている。

①『孟子』萬章上「堯崩、三年之喪畢、舜避堯之子於南河之南、天下諸侯朝觀者、不之堯之子之舜」。

○「白羽之白也、猶白雪之白、白雪之白、猶白玉之白與」①を「白羽の白は、猶ほ白雪の白のごとく、白雪の白は、猶ほ白玉の白のごときか」と読むのはまったく非である。「羽を白しとするの白は、雪を白しとするの白のごとく、雪を白しとするの白は、玉を白しとするの白のごときか」と読む人もあり、先輩の読みよりすぐれているようではあるが、これも非である。「羽の白きを白しとするは、雪の白きを白しとするがごとく、雪の白きを白しとするは、玉の白きを白しとするがごときか」と

読まなければならない。下の章の「白馬之白」「白人之白」「長馬之長」「長人之長」②も、これと同じである。その下の「長楚人之長、亦長吾之長」②の二句を「楚人の長を長とし、亦吾が長を長とす」と読むのは正しい。三カ所の文は同じ字法である。もし前の二カ所を旧読のように読むのであれば、(後者を)「長楚人の長、亦長吾の長」と読んでよいのであろうか。一笑に附してよい。字法がわかっていないことから、このようにあやまったのである。

①『孟子』告子上「告子曰、生之謂性。孟子曰、生之謂性也、猶白之謂白與。曰、然。白羽之白也、猶白雪之白、白雪之白、猶白玉之白與。曰、然。然則犬之性猶牛之性、牛之性猶人之性與。」

②『孟子』告子上「曰、異於白馬之白也、無以異於白人之白也、不識長馬之長也、無以異於長人之長歟。且謂長者義乎。長之者義乎。曰、吾弟則愛之、秦人之弟則不愛也、是以我爲悅者也、故謂之内。長楚人之長、亦長吾之長、是以長爲悅者也、故謂之外也」。

○「冢交之也」①を「ゐのこのまじはりなり」と読み、「獣畜之也」①を「けだものかふなり」と読むのは非である。「これを冢交するなり」「これを獣畜するなり」と読まなければならない。「冢交する」というのは、人を豚とおもってまじわることである。まじわるとは応対するという意味である。「獣畜する」というのは、けだものようにおもってやしなうことである。この詞は、「君事之」(之に君事す)、「父事之」(之に父事す)、「兄事之」(之に兄事す)、「師事之」(之に師事す)、「弟畜之」(之を弟畜す)というのと、字法は同じである。「君事する」とは、その人を尊んで君とおもってつかえることである。「父事する」とは、人を敬って父のようにおもってつかえることである。「兄事する」とは、兄のようにおもってつかえることである。「師事する」とは、師であるとおもってつかえることである。「弟畜する」とは、弟のようにおもって世話をすることである。史記の范雎傳に「令兩黥徒夾而馬食之」(兩黥徒をして夾みて之に馬食せしむ)②という「馬食」もこの字法である。馬の食う物を、馬にくわせるようにして罪人にくわせたので、「馬食之」(之に馬食す)と書いたのである。食は去聲、音嗣、くらはしむということである。

①『孟子』盡心下「孟子曰、食而弗愛、冢交之也、愛而不敬、獣畜之也。恭敬者、幣之未將者也。恭敬而無實、君子不可虚拘」。

②『史記』范雎蔡澤列傳第十九「須賈辭於范雎、范雎大供具、盡請諸侯使、與坐堂上、食飲甚設。而坐須賈於堂下、置莝豆其前、令兩黥徒夾而馬食之」。

○周易の「敬以直内、義以方外」①を「敬これをもつて内を直くし、義これをもつて外を方にす」と読むのは非である。「以」の字をただ「もつて」とだけ読まなければならない。論語に「義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之」(義以て質と爲し、禮以て之を行ひ、孫以て之を出し、信以て之を成す)②というのと同じ字法である。上を承けた字であるのに、「これをもつて」と読むのは、むつかしくわずらわしいことである。他のところにあっても、この類はすべて同様である。

①『周易』坤・文言「直其正也。方其義也。君子敬以直内。義以方外。敬義立而德不孤。直方大。不習无不利。則不疑其所行也」。

②『論語』衞靈公「子曰、君子義以爲質、禮以行之、孫以出之、信以成之、君子哉」。

以上、四書の中における俗儒の読みのまったくあやまったところを挙げる。四書は近世の学ぶものがかならず読み習うものであり、薩摩の僧文之よりこのかた、諸家のテキストがあり、世に行われている。その中の山崎氏のテキストなどは、その教えを受けたものでなければこれを使用しない。他の諸家のテキストは、海内に流布し、書を読む児童はひとり残らずその時手に入るテキストを使用してその時の師の句読を受けたので、読みあやまりがそのまま継承したうえに、それがあやまりであることもわかっていない。ここではとりあえず俗本の中にある、読みかたがあやまり、その義を失しているところを列挙して、初学に示す。これ以外はひとつひとつ指摘するのはむつかしい。一心にその義を求めて自得しなければならない。軽率に俗儒のあやまりを継承することがないように。これが学ぶもののこころがけることである。

○「所以」の二字を「ゆへん」と読むのは、古来からの習慣である。「ゆへん」は、「ゆへに」ということであるのを、「に」の字をはねたものである。昔、倭語の読みを始めた人がよくよく考えてこの二字を「ゆへん」と読んだので、文の中で「ゆへん」と読んで通じるところは多い。しかし一概に「ゆへん」とばかり読んではならない。「以て云云する所」と読んでよいところもある。さらに下からかえって「ゆへん」と読まずに、句の上で「このゆへに云云」と読んで適当なところもある。「所以」の二字にはこの三種類の読みがある。その場その場で上下の文勢をよく考えて最適な読み方にしたがわなければならない。山崎氏は「ゆへん」と読んだり「このゆへに」と読んだりすることをせず、一概に「以て云云する所」とばかりに読む、なんとかたくなではないか。

○「若夫」の二字を「もしそれ」と読むところは多いが、「かの云云のごとき」と読んでよいところもあり、下文の語意をよく考えて、最適な読み方にしたがわなければならない。

○「以爲」の二字を「おもへらく」と読むのも古来からの習慣である。この二字に「謂」の字の意味があるので、わが国の人が意味を考えてこのように読んだのである。あるいは下から返って、「云云とおもへり」と読むのも同じ。あるいは字のままに「以て云云とす」と読んでよいところもある。いづれであってもその意味は異なることはない。山崎氏は「おもへらく」と読むのをきらって、「以て云云とす」とし か読まない。これもかたくなである。

○「至若」の二字を「しかのみならず」と読むのは古来からの習慣であるが、その意味は適当ではない。「しかのみならず」というのは、事が加わることをいう詞である。「至若」は、事がきわまるところを推測して、これこれまでいたるという意味である。ただ「至若」という字があるところでは、その下文の語意はかならずずっと下まで長くつらぬくので、語意がおわったところから上に返って「云云のごときに至る」とは読みにくいことがある。しかしこの二字をはじめに読んでおこうと思っても、ほかに適当なことばがなく、しかたなく「しかのみならず」と読むのである。これも古の人が意味を考えてつけた倭語である。初学者はこのことを理解して、その意味に惑わされてはならない。「至如」も「至若」と同じである。

○句首に「若」の字があればかならず「もし」と読み、「如」の字があれば下から返ってかならず「ごとき」と読むのは固陋である。「若」と「如」は、字義はまったく同じである。「もし」と読んでも、「ごとき」と読んでも、どちらでもよい。その箇所の語意をよく考えて、いづれであっても最適な読み方にしたがえばよい。字が別であることにこだわってはならない。

○「而」の字、「則」の字は、いづれも上を承けて下へ送る詞である。だから「而」の字があれば上の句を「云云して」と読み、「則」の字があれば上の句を「云云すれば」と読む。これは通常の事である。しかし「而」の字の上にテといいにくく、「則」の字の上にレバといいにくいところがあるが、それにこだわってはならない。古文については、とりわけ拘泥しがたい。「而」の字を用いるべきところに「則」の字を用い、「則」の字を置くべきところに「而」の字を置く類は多い、どうして通常の字義に拘泥することができようか。山崎氏が字義に拘泥して、「而」の字の上ではかならずテといい、「則」の字の上ではかならずレバと読むのは、はなはだ頑固である。そもそも古人の助字の用い方は活法〔臨機応変な方法〕であり、一定しない。これは「而」「則」の二字だけに限らない。いづれの字もすべてそうである。ひとつの方法に固執してはならない。その箇所の語意をはっきりさせ、上下の文をよく考えて、意味が通じるように読まなければならない。この方法を知らなければ、古文古書は決して読むことはできない。

○「大凡」「大抵」「大都」「大略」「大約」「大要」「大較（かく）」「大槩」「大率（るい）」、これらの詞の意味はいづれも似ており、大きく異なることはない。いづれも大意を総括していう詞である。倭語を用いて「おほよそ」と読んだり、「おほむね」と読んではならない。いづれも音で読まなければならない。このいくつかの詞は、大意は同じであるが、字がそれぞれ異なるので、その意味もすこしづつ異なるところがある。しかし倭語で読めば、混同して区別がないだけでなく、その字体を記憶するのもむつか

しく、学問にとって有益なことではない。

○「然」の字と「而」の字の意味は通じる。「而」の字には「然」の字に似たところがあり、「然」の字に「而」の字にも似たところがある。この両字は「しかうして」と読むところがあり、「しかれども」と読むところがあり、「しかるに」と読むところがあり、やはり一定しない。山崎氏は「然」の字を「しかるに」としか読まない。やはり融通がきかないという欠点である。さらに「而」の字、「然」の字一字を単独で用いることが多かったり、「然而」と連属して用いたりすることがあるが、別に深い意味があるわけではない。

○「而」の字と「以」の字を対にして用いることがある。楚辭に多い。二字の意味は異ならない。「以」を「而」にかえ、「而」を「以」にかえても、意味はいづれも通じる。さらに「而」の字を「之」の字の意味に用いることがある。左傳の「有威而可畏、謂之威。有儀而可象、謂之儀」①とあるのを「威ありて畏るべき、これを威といふ。儀ありて象るべき、これを儀といふ」と読むが、この二つの「而」の字は「之」の字の意味である。威の畏るべきものがあることを威といい、儀の象るべきものがあることを儀という、という意味である。古書の中にはこのような例が多い。知っておかなければならない。

①『左傳』襄公三十一年「有威而可畏、謂之威。有儀而可象、謂之儀」。

○俗儒の輩が「則」の字を「ときんば」と読むのは非である。「ときんば」は「ときには」である。上の句に「云云するときは」という意味があるところには、下の句に「則」の字があることが多く、「すなはち」と承けるのが通常の文法である。「則」の字は「すなはち」と読んで、上に「ときは」という詞を承けて下へ送る詞であるが、「則」の字に「ときは」という意味があるのではない。だから文を句読する場合には、「則」の字の上で句読し、「則」の字を下の句に属して読むのである。もし「ときんば」と読めば上の句に属して読むことになる。

○「也」の字は、倭語では「なり」という詞であり、句末では「なり」と読んでよいところが多いが、「なり」と読みがたいところも多い。深く拘泥してはならない。山崎氏はこの字があるところはかならず「なり」と読むので、倭語ではかえってくどくなる場合がある。そもそも中華とわが国とでは言語がもともと異なる。しかし中華の語をことごとく倭語として読もうとするので、その意味を失することが多い。どれほど巧みに読んだところで、漢語を完全に倭語とすることはできない。ただおおまかに翻訳して、意義が説明しがたいところは、その趣旨を心に会得しなければならない。これが倭読の大法である。「也」の字が句末にあって、上の文を解釈する詞に用いているところは、かならず「なり」と読む。大學に「如切如磋者、道學也、如琢如磨者、自脩也」（切するが如く磋するが如しとは、學を道ふなり。琢するが如く磨するが如しとは、自ら脩むるなり）①というのは、「也」の字が上の「者」の字に呼応して、いづれも上の文を解釈する詞である。周易の大傳に「潛龍勿用、陽在下也。見龍在田、德施普也」（潛龍用いること勿れとは、陽、下に在ればなり。見龍田に在りとは、德の施し普きなり）②というのは、上に「者」の字はないが、下に「也」の字があるので、上の文を解釈する詞である。春秋傳に「公會戎于潛。修惠公之好也」（公、戎に潛に會す。惠公の好みを修むるなり）③、「鄭人伐衞。討公孫滑之亂也」（鄭人、衞を伐つ。公孫滑が亂を討するなり）④というのも同じ文法である。いづれも経文を上に挙げて、下の句がこれを解釈しており、伝文の体である。俗儒はこのことを知らずに「公、戎に潛に會して、惠公の好みを修む」、「鄭人衞を伐ちて、公孫滑が亂を討す」と読む。これでは経文と伝文とをつらねて読んでおり、解釈する意図が見えない。「宋人伐鄭、圍長葛。以報入郛之役也」（宋人、鄭を伐ちて長葛を圍む。以て郛に入るの役に報ふなり）⑤、「公及莒人盟于浮來。以成紀好也」（公、莒人と、浮來に盟ふ。以て紀の好みを成すなり）⑥というのも同じ文法である。この文には下の句の冒頭に「以」の字があるので、俗儒は「以」の字を見て上下をつなぐ詞であるとおもい、「以」の字の下が伝文であることを知らずに上の句につらねて読むが、これは大きなあやまりである。これらの文では、「也」の字を「なり」と読まなければ、その意味は通じがたい。これ以外はかならずしも「なり」と読まなくてよい。ましてや句中にあるものは、倭語を附けるのがとりわけむつかし

く、ただ助字と見てよい。

①『禮記』大學「如切如磋者、道學也、如琢如磨者、自脩也」。

②『周易』乾・大傳「潛龍勿用、陽在下也。見龍在田、德施普也」。

③『左傳』隱公二年「二年、春、公會戎于潛。修惠公之好也」。

④『左傳』隱公二年「鄭人伐衞。討公孫滑之亂也」。

⑤『左傳』隱公五年「宋人伐鄭、圍長葛。以報入郛之役也」。

⑥『左傳』隱公八年「公及莒人盟于浮來。以成紀好也」。

○「是歲」の字を「ことし」と読むのは非である。「このとし」と読まなければならない。「ことし」と読めば今歲の意味になる。「是歲」は今歲の意味ではない。文章中に「是歲」とある場合は、かならずその前に某（それ）の年を掲出し、下でその年の出来事を述べる時の詞である。「是歲」というのは前に掲出した某（それ）の年を指す。前に某の年を掲出しなければ「是歲」とはいわない。東坡が後赤壁の賦の発端に「是の歲十月の望」①と書いたのは、前赤壁の賦に「壬戌の秋」②というのを承けて、同年の十月十五日ということである。題に「後赤壁」とあれば、前赤壁に続けて作ったものであることは明白である。だから文中に「復（ま）た赤壁の下に遊ぶ」①といい、「曾（かつ）て日月の幾何にして、江山復（ま）た識る可からず」①というのも、いづれも前の賦に対していうのである。もし前の賦がなければ、この賦に「是歲」ということはできない。

「是月」「是日」という字もこの意味である。今月・今日という意味ではない。禮記の月令に「是月也」という字をたくさん用いるのは、毎月の初めに「孟春之月」「仲春之月」といったあとに、さらにその月の出来事を述べているので、「是月也」と置いたのである③。王羲之が蘭亭の記に「是の日や、天朗に氣清み、惠風和暢す」と書いたのは、発端に「永和九年、歲は癸丑に在り、暮春の初」といっているので、その日を指して「是日也」と置いたのである④。もし「是日」を今日と見て「けふ」と読めば、その意味を失してしまう。「是歲」という字もこの意味から推測することができ、決して今歲の意味ではない。過ぎし昔の事を言う場合に、「是歲」と書いたところは多い。「ことし」という倭語も、もともとは「このとし」という意味であったはずであるが、「ことし」といえば今歲のこととなり、「このとし」といえば今昔に通じる詞となる。これが倭語の習慣である。

①『後赤壁賦』「是歲十月之望、步自雪堂、將歸于臨皐。（中略）於是携酒與魚、復游於赤壁之下。江流有聲、斷岸千尺、山高月小、水落石出。曾日月之幾何、而江山不可復識矣」。

②蘇東坡『前赤壁賦』「壬戌之秋、七月既望、蘇子與客泛舟遊於赤壁之下」。

③『禮記』月令「孟春之月、日在營室、昏參中、旦尾中。（中略）是月也、以立春。先立春三日、大史謁之天子曰、某日立春、盛德在木」。

『禮記』月令「仲春之月、日在奎、昏弧中、旦建星中。（中略）是月也、安萌芽、養幼少、存諸孤」。

④王羲之『蘭亭記』「永和九年、歲在癸丑、暮春之初、會于會稽山陰之蘭亭、脩禊事也。（中略）是日也、天朗氣清、惠風和暢。仰觀宇宙之大、俯察品類之盛」。

○「往歲」「往年」「昔歲」「昔年」「去歲」「去年」「客歲」の類を一概に「こぞ」と読むのは非である。「こぞ」という倭語は前一年を指す詞である。「客」は隔字と同音で、「隔歲」という意味である。それ以外はいづれも前数年に通じる詞であるので、「こぞ」と読んでは差し障る場合がある。そのうえ倭語で読めば、字体が区別できず、記憶に不便である。音で読むほうが勝っている。

○李太白の詩に「解道長江靜如練」①という句があるが、「解道」を「いふことを解（げ）す」と読むのはあやまりである。「解道す」と読まなければならない。解は去聲、廣韻に「胡懈の切、曲解」②と註し、字彙に「曉なり」③と註する。領解するという意味である。倭語で合点するという意味であり、「道」はつけ字である。「解道」は俗語であり、ただ領解するということである。知るということを、俗語で「知道す」というのと同じである。「道」の字に意味はない。太白の詩の意味は、「長江靜にして練の如し」④と謝玄暉の詩の語にあるが、今実景に相対してみて、はじめて玄暉の詩の摹写が工（たくみ）であることを領解した、ということである。東坡の詩にも「謫仙

此語誰解道」（謫仙の此の語、誰か解道せん）⑤という句がある。「謫仙」は李太白であり、「此語」とは太白の峨眉山月の詩を指していう⑥。謫仙の峨眉山月の詩の意味を誰が領解するであろうか、ということである。東坡の詩の意味も、実景に相対さなければ太白の詩の妙処を領解しがたい、ということである。張籍の詩に「無人解道取涼州」（人の涼州を取ることを解道する無し）⑦というのも、辺将の中に涼州を取るべきであるということの意味を領解する人はいない、ということである。唐詩に「悲を解す」「愁を解す」というのは、「悲」「愁」の字に意味がある。「解」の字は知るという意味であり、「悲を解せず」「愁を解せず」というのは、「悲を知らず」「愁を知らず」ということである。しかし「解道」は、「解悲」「解愁」と同じではない。「解」の字だけに意味があり、「道」の字は附けただけのものである。そもそも俗語にこの類は多い。

①李白『金陵城西樓月下吟』「解道長江淨如練、令人長憶謝玄暉」。

②『廣韻』去聲・十五卦「胡懈切、曲解」。

③『字彙』酉集「解、又下戒切。音械。曉也」。

④謝朓『晚登三山還望京邑』「餘霞散清綺、澄江淨如練」。

⑤蘇軾『送張嘉州』「峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流。謫仙此語誰解道、請君見月時登樓」。

⑥李白『峨眉山月歌』「峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流。夜發清溪向三峽、思君不見下渝州」。

⑦張籍『涼州詞』三首の三「鳳林關裏水東流、白草黄榆六十秋。邊將皆承主恩澤、無人解道取涼州」。

○医書に「切脉」①という字がある。医家の輩が「脉を切にす」と読むのはあやまりである。「脉を切す」と読まなければならない。切は「按なり」②と註して、按は「おす」と訳する。「脉を切す」というのは、脉を診るのに指にて脉処をおすことである。「脉を切にす」と読めば、迫切・切近の意のようになる。わづかにニというテニヲハをつけただけで、字義を失することになる。これが倭語の体である。だから倭語はテニヲハに注意が必要なのである。

①『素問』脈要精微論「切脉動靜而視精明」、注「切謂以指切近於脈也」。

②『史記』扁鵲倉公列傳第四十五「越人之爲方也、不待切脉望色聽聲寫形、言病之所在」、正義「楊玄操云、切、按也」。

○方書の膏薬を煉る法に「下火」「上火」というものがある。「火をくだす」「火をあぐる」と読むのはあやまりである。「火よりをろす」「火にのぼす」と読まなければならない。膏薬を煉るには、鍋を何度もおろしたりかけたりすることがあるからである。

○方書に「酒浸」「浸酒」という字がある。古来の読みでは「酒浸」も「浸酒」もともに「酒にひたす」と読むが、これは字法をわかっていない。「酒浸」と「浸酒」は同じ事ではないのでこのように異なる書き方をしたのである。これが字法である。「酒浸」とは、薬を調製する場合、酒に浸したり、酒で洗ったり、酒で煮たり、酒で蒸したりする。これらの製法を書する場合、文法では酒の字はいづれも上にあり、「酒浸」「酒洗」「酒煑」「酒蒸」と書く。「酢浸」「酢洗」「酢煑」「米泔浸」「米泔洗」などはいづれもこの類である。「水煎」「酒煎」も、水で煎じ、酒で煎じるという意味であり、字法は同じである。「浸酒」は、薬を酒に浸して、その薬を捨てて酒を用いることなので、「浸酒」と書く。だから「酒浸」を「酒にて浸す」と読み、「浸酒」を「浸せる酒」と読まなければならない。薬を火で焼き、その灰を用いることを「焼灰」と書くのは、焼きたる灰ということである。薬に水をかけたり、酒をかけたりして、灰湯をたれるように漉過し、その汁や酒を用いる場合は、「淋汁」「淋酒」と書く。いづれも「浸酒」と同じ字法である。だから文には篇法、章法、句法、字法という四つの法があり、これを知らなければ文を作ることはできない。文を作るだけでなく、書を読む場合も、これを知らなければ文義に通じることはできない。

○説文に「从某某聲」という語がある。形聲の字にかならずこの註がある。説文の語なので、字書には往々にしてこれを引用する。「从」は古の從の字である。俗儒が「某某の聲に从ふ」と読むのはあやまりである。「某に从ふ某の聲」と読まなけれ

ばならない。この註の意味は、そもそも文字を作るには「六書」という六つの法があり、その六番目を形聲といい、諧聲ともいう。形聲とは二字を合わせて一字とする場合に、一字は主として形をあらわし、一字は主として聲をあらわすことである、ということである。たとえば江・河の字などは、水旁に工・可を附けている。水は形であり、工・可は聲である。だから江の字を説明する場合は「从水可聲」（水に从ふ可の聲）②というのである。それ以外は類推してわかる。

①『説文解字』「江、水出蜀湔氐徼外嶓山東入海、从水工聲」。

②『説文解字』「河、水出焞煌塞外昆侖山、發原注海、从水可聲」。

○「爲某所云云」という言葉の「爲」の字を「ため」と読んで、「某のために云云せらる」と読むのはあやまりである。「爲」の字が去聲であるときは「ために」と読まなければならないが、この「爲」の字は字のとおり平聲である。「爲所」の二字を用いたのは「某の云云する所となる」という意味であり、「爲所」の二字を合せて「らるる」という意味である。だから「爲某所云云」という言葉は「某に云云せらる」と読まなければならない。あるいは「某の云云する所となる」「某の云云する所たり」などと読んでよいところもある。上下の文を詳細に検討して、適当なものにしたがわなければならない。さらに「爲」の字だけあり、「所」の字がないところがある。論語の「不爲酒困」①がそれである。「酒に困せられず」と読まなければならないのを、俗儒が「酒のみだれをなさず」と読むのはあやまりである。「所」の字はないが、あるという意識をもち、「爲」の字だけでも「らるる」という意味があるのである。さらに「所」の字があってもなくても、「爲某」という下に「之」の字を入れたところもある。このように字法は一様ではないが、「爲」の字、「所」の字にいづれも「らるる」という意味があるので、その意味は同じである。「爲」の字が去聲でないことは、これらのことからわかる。

①『論語』子罕「子曰、出則事公卿、入則事父兄。喪事不敢不勉。不爲酒困。何有於我哉」。

○上にある「同」「異」の字を下から返って読む場合、「某同じ」「某異なり」と読むのは非である。このように読めば、「同」「異」の字が下にあるものと区別がない。上にあるものは「某を同じくす」「某を異にす」と読まなければならない。さらに禮記に「降等」①という字があるが、「しなくだる」と読むのは非である。音にて「降等」と読まなければならない。そもそも字が上にある場合と下にある場合とで、その意味は変化する。倭読をするものはかならずこれを区別しなければならない。俗儒は字法をわかっておらず、混同して同じように読むので、人をあやまらせることが多い。

①『禮記』曲禮上「主人就東階、客就西階、客若降等、則就主人之階。主人固辭、然後客復就西階」。

○そもそも文章にはかならず助語辞がある。「之」「乎」「者」「也」「矣」「焉」「哉」など、その類ははなはだ多い。古人の助字の用い方には臨機応変な方法があって一定しない。とりあえずこれらの七字についていうと、「之」の字は「これ」と読み、「の」と読むのが通例である。毛詩に「亦孔之將」（亦孔だ將いなり）、「亦孔之嘉」（亦孔だ嘉し）、「亦孔之休」（亦孔だ休し）①というが、この「之」の字には意味はなく、衍文のようであるが、どう読むべきであろうか。楚辞に「余既滋蘭之九畹兮、亦樹蕙之百畝」（余れ既に蘭を九畹に滋くす、亦蕙を百畝に樹う）②とあるが、これらの「之」の字は「於」の字の意味である。高唐の賦に「巨石溺溺之瀺灂兮」（巨石溺溺として瀺灂たり）③、「洪波淫淫之溶滃」（洪波淫淫として溶滃たり）③とあるが、これらの「之」の字は「以」の字の意味である。「雲興聲之霈霈」（雲興りて聲霈霈たり）③、神女の賦に「拂墀聲之珊珊たり」（墀を拂ひて聲珊珊たり）④とあるが、これらの「之」の字は語助の詞にすぎず、まったく意味はなく、まるで「兮」の字のようである。詞賦にはこの類は多い。このようなところは、通例のように「これ」とも読まれず、「の」とも読まれない。次に「乎」の字は疑問の詞に用いることが多く、「や」と読み、「か」と読む。さらに感嘆する詞であり、「かな」と読むのが通例である。さらに句中にあって、「於」の字のように用いるところがある。しかし

荘子に「有乎生、有乎死、有乎出、有乎入」（生有り、死有り、出有り、入有り）⑤というのは、句中にあって何の意味もない。さらに燕王喜んで樂閒に謝する書に「寡人雖不肖乎、未如殷紂之亂也。君雖不得意乎、未如商容箕子之累也」（寡人、不肖なりと雖も、未だ殷紂が亂の如くならず。君、意を得ずと雖も、未だ商容箕子が累の如くならず）⑥というのは、句末にあって何の意味もない。これらの「乎」の字をどのように読めばよいのか。次に「者」の字は「もの」と読み、「は」と読むのが通例である。「古者」「今者」などの「者」の字はいづれも助字であり、意味はない。「古は」「今は」という意味ではない。この類はなお多い。次に「也」の字は「なり」と読むのが常例である。檀弓に「爲伋也妻者、是爲白也母、不爲伋也妻者、是不爲白也母」（伋が妻爲る者は、是れ白が母爲り、伋が妻爲らざる者は、是れ白が母爲らず）⑦とある。この「也」の字は「之」の字のようである。しかし人名の下に「也」の字を附ける例は古文に多いので、この類はまだ怪しむに足りないといってもよい。毛詩に「俾也可忘」（忘る可から俾む）⑧といい、「匪直也人、秉心塞淵」（直だ人、心を秉ること塞淵なるに匪ず）⑨というが、これらの「也」の字はどのように読めばよいのか。荘子に「胡蝶胥也化而爲蟲」（胡蝶胥ひ化して蟲と爲る）⑩とあるが、この「也」の字はどういう意味か。衍文としかみえないが、衍文ではない。古書にこの類は多い。次に「矣」の字には古来倭訓がない。ただ句末にあって、語が終るところに置くのが通例である。しかし論語に「巧言令色、鮮矣仁」（巧言令色、仁鮮し）⑪というのは、「矣」の字が句中にあって、語が終る詞ではない。次に「焉」の字は、「これ」と読んだり、「ここに」と読んだりすることが多い。さらに句中にあったり、句末にあったりして、「矣」の字や「也」の字のように、何の意味もなく用いたところがある。禮記に「故先王焉爲之立中制節」（故に先王之が爲に中を立て節を制す）⑫とあり、荘子に「有數存焉於其閒」（數の其の閒に存する有り）⑬とある「焉」の字は衍文のようである。楚辭に「馳椒丘且焉止息」（椒丘に馳て且く止息す）⑭、「乃遂焉而逢殃」（乃ち遂にして殃に逢ふ）⑮とあるが、これらの「焉」の字はいづれも常例ではない。次に「哉」の字は、感嘆の詞としては「かな」と読み、疑問の詞としては「や」と読むのが通例である。しかし荘子に「世雖貴之哉」（世之を貴ぶと雖も）⑯といい、國語に「余雖靦然而人面哉」（余れ靦然として人面なりと雖も）⑰といい、楊子雲の解嘲に「雖其人之膽智哉」（其の人の膽智なると雖も）⑱というが、これらの「哉」の字は、感嘆の詞でもなく、疑問の詞でもなく、助字にすぎない。倭語でどのように読むべきであろうか。古人の文が拘泥しないことは以上のとおりである。他の助字もこの例から類推することができる。先賢の言葉に「古人、活心を以て活書を看る」⑲という。今の人も書を看るにはかならず活眼を具えなければならない。活眼がなければ、古人の文にある活法を看ることはできない。いたづらにその時の師の読法を守って変化を知らないのは、柱に膠して瑟を調えることである。最近、山崎氏の徒は、文章を理解せず、「而」の字をテと読み、「則」の字をレバと読むのを定法とし、「而」の字があれば意味も考えずにかならずテと読み、「則」の字があれば意味も考えずにかならずレバと読み、「而」の字、「則」の字を上の句につづけて読む。これは句読をわかっていない。だから「而」の字がないところには、死んでもテというテニヲハを附けず、「則」の字がないところには、死んでもレバというテニヲハを附けない。（その結果）文義を大きく阻害して、みづからあやまるだけでなく、後学さえもあやまらせる。頑固のきわみであり、これほどおかしく気の毒なことはない。だから学ぶものは文法の理解に務めなければならない。文法を理解しなければ、万巻の書を読んだとしても、古人の趣旨を得ることはできない。山崎氏の徒などは、一生をついやしたとしても、古書を読解することはありえない、浅はかなことである。

①『詩經』豳風・破斧「既破我斧、又缺我斨。周公東征、四國是皇。哀我人斯、亦孔之將。既破我斧、又缺我錡。周公東征、四國是吪。哀我人斯、亦孔之嘉。既破我斧、又缺我銶。周公東征、四國是遒。哀我人斯、亦孔之休」。

②『楚辭』離騷「余既不難夫離別兮、傷靈脩之數化。余既滋蘭之九畹兮、又樹蕙之百畝。畦留夷與揭車兮、雜杜衡與芳芷」。

③宋玉「高唐賦」（『文選』巻十九）「巨石溺溺之瀺灂兮、沫潼潼而高厲。水澹澹

而盤紆兮、洪波淫淫之溶瀜。奔揚踊而相擊兮、雲興聲之霈霈」。

④宋玉「神女賦」（『文選』巻十九）「動霧縠以徐步兮、拂墀聲之珊珊」。

⑤『莊子』庚桑楚「有長而無本剽者、宙也。有乎生、有乎死、有乎出、有乎入、入出而無見其形、是謂天門」。

⑥『戰國策』燕策三「怨惡未明而明棄之未盡厚也、寡人雖不肖乎、未如殷紂之亂也。君雖不得意乎、未如商容箕子之累也」。

⑦『禮記』檀弓上「子思曰、昔者吾先君子無所失道、道隆則從而隆、道隆則從而隆。汲則安能。爲汲也妻者、是爲白也母、不爲汲也妻者、是不爲白也母」。

⑧『詩經』邶風・日月「日居月諸、出自東方。乃如之人兮、德音無良。胡能有定、俾也可忘」。

⑨『詩經』鄘風・定之方中「靈雨既零、命彼倌人。星言夙駕、説于桑田。匪直也人、秉心塞淵、騋牝三千」。

⑩『莊子』至樂「烏足之根爲蠐螬、其葉爲胡蝶。胡蝶胥也化而爲蟲、生於竈下、其狀若脱、其名爲鴝掇」。

⑪『論語』學而「子曰、巧言令色、鮮矣仁」。

⑫『禮記』三年問「將由夫修飾之君子與、則三年之喪、二十五月而畢、若駟之過隙、然而遂之、則是無窮也。故先王焉爲之立中制節、壹使足以成文理、則釋之矣」。

⑬『莊子』天道「不徐不疾、得之於手而應於心、口不能言、有數存焉於其閒」。

⑭『楚辭』離騷「回朕車以復路兮、及行迷之未遠。步余馬於蘭皐兮、馳椒丘且焉止息。進不入以離尤兮、退將復脩吾初服」。

⑮『楚辭』離騷「日康娛而自忘兮、厥首用夫顛隕。夏桀之常違兮、乃遂焉而逢殃。后辛之菹醢兮、殷宗用而不長」。

⑯『莊子』天道「世之所貴道者書也、書不過語、語有貴也。語之所貴者意也、意有所隨。意之所隨者、不可以言傳也、而世因貴言傳書。世雖貴之哉、猶不足貴也、爲其貴非其貴也」。

⑰『國語』越語下「余雖靦然而人面哉、君猶禽獸也」。

⑱楊子雲『解嘲』（『文選』巻四十五）「雖其人之膽智哉、亦會其時之可爲也」。

⑲『近古史談』識篇・了伯聽平語「寧靜子曰、古人云、以活眼讀活書、天德寺氏之聽平語、可移以爲讀史之法焉」。

書を読む法

学問は書を読むことから始まる。読書の方法には二つある。一つは華音の読み、二つは倭語の読みである。「華音」とは今の唐音である。「華音の読み」とは、中華の人のように唐音で上から下へまっすぐに読みくだすことである。「倭語の読み」とは、倭音や倭訓を用いて、上下顛倒して読むことである。この二つの方法はどちらか一方だけを廃してはならない。学ぶものはまず華音の読みを習い、次に倭語の読みを習わなければならない。その理由は次の通り、書を読むものは記憶を基本とする。「記憶」とはおぼえることである。万巻の書を読んでも、記憶しなければなんの役にも立たない。だから中華において学ぶものは、書を読めばかならず誦を成す。「誦」とはそらよみである。「誦を成す」とは、その文句をそらでいうことである。かならず誦を成すのはなんのためかというと、いたづらに談論を助け、引用に資するためではない、誦を成さなければ、その文義に通じることがむつかしいからである。倭語の読みであっても誦を成すことはできるが、役にたたないことが五つある。一つには倭音で誦すれば字音が混同する。二つには倭訓で誦すれば字義が混同する。三つには顛倒の読みでは句法・字法が失する。四つには助語辞がすべて抜け落ちる。五つには句読が明らかではない。この五つの弊害があるので、辛苦して諳誦できたとしても、わづかに談論の助けにしかならず、引用するにもおぼつかなく、ましてや文義に通じることはかなわない。華音で読めば、誦を成すことも容易で、右にあげた五つの弊害もなく、引用するのにも便利で、文義に通じることもむつかしくない。釋氏の徒が佛経を誦するのは、倭音ではあるけれども、顛倒の読みをせず音だけで上から下に読むので、その文句をすべて諳誦して一字の遺漏もない。しかし倭音に

は四聲の区別がなく、字音が混同することが多いので、諳誦したものがあやまりやすい。だから誦を成そうとおもえば、華音を習うのがいちばんよい。華音に習熟すれば、字音は明らかであり、あやまりは少ない。これがその益である。次に倭語の読みを習わなければならないというのは、わが国の人は、音で順に読みくだしてその文句を記憶するだけであって、その意味を理解していない。だから華音に通じた上で、さらに倭読を習わなければならないのである。しかし華音の読みは、字音を正しくし、句読を明らかにするだけにすぎず、それ以外に仔細はない。倭読は古今諸家の方法がそれぞれ異なり、たがいに得失がある。いづれを是とし、いづれを非としようもないので、古今を斟酌し、諸家を考えあわせて、その最善のものをえらんで用いるべきである。今その大法を挙げて、初学に示す。

○読書の法は、まづ句読を明らかにしなければならない。句読が明らかでなければ、文義は通じがたい。「句読」とは句ぎりである。語の終るところを「句」という。語は終らないが文が長くつづくところがあり、そのなかの切ってもよいところで何カ所か切って読むことがある。これを「読（とう）」という。読は去聲、音豆、倭音トウである。中華の人は、この句読だけで文義を理解するので、童子などが師について書を読み、文字を学ぶことを「句読を受く」「句読を授かる」という。文章の意味は句読によってかわるので、句読が重要なのである。わが国の人は、倭語を用いて顛倒の読みを行い、テニヲハによって意味を取るので、句読を知らなくてもおおよそその意味に通じることができる。だから結局句読を疏略にしてしまい、文義があやまっていることにも気がつかない。師範と称せられるほどのものであっても、この欠点を免れないものは多い。ましてや学ぶものならなおさらである。そもそも文章には、篇法、章法、句法、字法がある。古人の書を読む場合でも、今日文章を作る場合でも、この四つの法を知らなければ読めないし書けない。これを知ることができるのも、まづ句読を明らかにした上の事である。だから書を読むものは、かならずまづ第一に句読に意を注がなければならない。

○文章には短句があり、長句がある。短句は一字二字三字の句、長句は十余字にいたる句である。そもそも句であるところは一字であっても切って読まなければならず、テニヲハでつないではならない。たとえば左傳の「偃且射子鉏。中頰。殪」①は、「偃且射子鉏」五字一句、「中頰」二字一句、「殪」一字一句である。「偃して且つ子鉏を射て頰に中て殪す」と読んではならない。「偃して且つ子鉏を射る。頰に中（あた）る。殪る」と読まなければならない。定公三年②に、「三年」二字一句、「春」一字一句、「二月」二字一句、「辛卯」二字一句、「邾子在門臺」五字一句、「臨廷」二字一句、「閽以缾水沃廷」六字一句、「邾子望見之」五字一句、「怒」一字一句、「閽曰」二字読、「夷射姑旋焉」七字一句、「命執之」三字一句、「弗得」二字一句、「滋怒」二字一句、「自投于牀」四字一句、「廢于鑪炭」四字一句、「爛」一字一句、「遂卒」二字一句、とあるのは、長短の句法をうかがい見ることができる。このように句を切って読めば、句法・字法はおのづから明らかであり、意味も理解しやすい。これを例として、他は類推して知ることができる。先輩が書を読んでいるのをみると、句読を分かたず、倭語のテニヲハでつなげて、数句を一連として読んでいることが多い。これは文法にくらいからである。学ぶものはこのことをよく察知しなさい。

①『左傳』定公八年「皆取而傳觀之。陽州人出、顔高奪人弱弓、籍丘子鉏擊之、與一人俱斃。偃、且射子鉏、中頰、殪」。

②『左傳』定公三年「三年、春、二月辛卯、邾子在門臺、臨廷。閽以缾水沃廷、邾子望見之、怒。閽曰、夷射姑旋焉。命執之。弗得、滋怒、自投于床、廢于爐炭、爛、遂卒。先葬以車五乘、殉五人。莊公卞急而好潔、故及是」。

○顛倒の読みは、わが国の俗習なので、すぐに改めるのはむつかしい。ただ字を読む場合、倭訓で読まないとぴったりしないところを除いて、音で読めるかぎりは音で読まなければならない。古来の読法は、漢語を訳して倭語とすることを重視し、漢語を倭文・倭歌に使用しようとしたので、人名地名の類以外、倭訓で読めるかぎりは倭訓を用いたのである。だから中華の書がこの国の国名草（かな）子のようになり、聞くかぎりではやさしく面白いように感じるが、これは俗人の耳を悦ばせるだけであり、中華を学ぶものにとって利益は少ない。文章の道に志すものは、この弊害を取

り除くように努めなければならない。音で読むのには三つの利益がある。一つにはわが国には言語の数が少なく、ひとつの倭訓を復数の字に通じて用いるので、倭訓で読むとその字を記憶せず、記憶したとしてもあやまりが多い。音で読めばただちにその字を記憶する。二つには漢語には一字にたくさんの意味がある。朱子の大學の註に「慊は、快なり、足なり」①といい、論語の註に「厭は棄絶なり」②というのなどは、いづれも一字に二字の意味を兼ねている。これらの字を倭訓で読めば、ひとつの意味だけに限定されてしまうが、音で読めばたくさんの意味を包含してのこすところがない。三つには倭語は煩瑣であり、記憶するのに骨がおれる。音で読めば簡約であって諳誦しやすい。倭訓で読む場合と音で読む場合の得失は以上のとおりである。だから昔から倭訓で読み習わしている言葉であっても、音で読んで聞き苦しくないところは、今改めて音で読まなければならない。

①『禮記』大學「此之謂自謙」、鄭注「讀爲慊、慊之言厭也、謂誠意自足」、朱注「快也、足也」。

②『論語』雍也「子見南子。子路不説。夫子矢之曰、予所否者。天厭之、天厭之」、朱注「厭、棄絶也」。

○倭語はテニヲハを用いて文章をつづる。テニヲハというのは上下のつなぎである。だからヲというべきところをニといい、ニというべきところをヲといえば、意味がかわってしまう。これはあらゆるテニヲハがそうである。だから倭語はテニヲハがきわめて重要である。倭読をするものは、このことをゆるがせにしてはならない。ただしそのなかに一種のむつかしい詞がある。「云云せば」といってよいところを「云云せましかば」といい、「云云せじ」といってよいところを「云云せざらまし」といい、「いふべきのみ」といってよいところを「いふべからくのみ」といい、「云云のみ」といってよいところを「云云ならくのみ」といい、「云云す」、または「云云せり」といってよいところを「云云しけらし」といい、「云云なり」といってよいところを「云云ならし」という。これらの詞は倭語では風雅のようにみえるが、中華の書を読むのにこれを用いてはむつかしいだけであって、学ぶもののためにいささかも利益はない。かならずこの類の詞を除き去って、簡易な読み方に従わなければならない。

○倭読の法に、毛詩・文選などには、音訓両読を用いることがある。「音訓両読」とは、音で読んだ上に、さらに倭訓で読むことである。「關關たる雎鳩」①を「關關とやはらぎなく雎鳩のみさご」と読み、「參差たる荇菜」①を「參差とかたたがひなる荇菜のあささ」と読む類がそれである。この方法がいつの頃から始まったのかはわからないが、もっとも無益なことである。これをやめて常例のように読まなければならない。その理由は、毛詩・文選などの文にも、倭語で読むところがあり、倭語で読まないところがある。鳥獸草木の名も、この国に存在しないものには倭名がないことが多い。ところが一概に倭名を施そうとすると牽強附会を免れない。ましてや地名、人名、宮殿名などにはもともと倭名がないのに、どうしてそれに倭訓を施すことができようか。古来の読みでは、山の名には「やま」を附け、水の名には「みづ」を附け、殿の名には「との」を附け、珠玉の名には「たま」を附けたところがある。文選にとくに多い。これはすべて倭名がない物に倭訓を施そうとしたものであって、蛇足を画いたようなものである。愚昧の至りであり、おかしいことにもほどがある。これらの読みを一切禁止しなければならない。

①『詩經』周南・關雎「關關雎鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑。參差荇菜、左右流之。窈窕淑女、寤寐求之」。

○賈誼の過秦論に「雲集響應景從」①という字がある。「雲集」は雲の集まるが如しという意味である。「響應」は響の聲に應ずるが如しという意味である。景は影と同じで、「景從」は影の形にしたがうが如しという意味である。いづれも譬喩である。古来の読みでは「雲のごとくに集まり、響のごとくに應ず、景のごとくに從ふ」と読む。意味は間違いではないが、詞がむつかしく、誦読に不便である。ただ音で「雲集響應す」「景從す」と読まなければならない。そもそも文の中にあるこの類の詞は、いづれも譬喩の詞である。狼の顧みるがごときを「狼顧」②といい、虎の物を視るがごときを「虎視」③といい、龍の勢いよく駆けあがるがごときを「龍驤」

④といい、蜂の起るがごときを「蜂起」⑤といい、鼎の湯が沸騰するがごときを「鼎沸」⑥といい、糜の沸騰するがごときを「糜沸」⑦という。例を類推して知ることができる。そもそもこの類はいづれも譬喩の詞であり、名目である。だから音で読んだほうがよい。倭語で読めば名目にならない。

①賈誼「過秦論」(『文選』巻五十一)「天下雲集而響應、嬴糧而景從」。
②『戰國策』齊策「秦雖欲深入、則狼顧恐韓魏之議其後也」。
③『三國志』呉書・孫權傳「據三州、虎視於天下」。
④『後漢書』呉蓋傳贊「呉公鷙彊、寔爲龍驤」。
⑤『後漢書』謝弼傳「今邊境日蹙、兵革蜂起、自非孝道、何以濟之」。
⑥『漢書』霍光傳「羣下鼎沸、社稷將傾」。
⑦『漢書』揚雄傳「豪俊糜沸雲擾、羣黎爲之不康」。

○未明に寝床の上で食事をすることを「蓐食」という。通常の早飯を「朝食」という。日中に食事をすることを「中食」という。晩飯を「夕食」という。いづれも名目である。蓐食を「しとねにはむ」と読み、朝食を「あしたにくらふ」と読み、夕食を「ゆふべにくらふ」と読む類は、いづれも名目を失していてよくない。「蓐食す」「朝食す」「中食す」「夕食す」と、音で読まなければならない。

○朝廷で人を大声で罵倒することを「廷叱」という。朝廷で人に恥辱をあたえることを「廷辱」という。朝廷で君を諫めて君と争うことを「廷爭」という。衆人の中で人に恥辱をあたえることを「衆辱」という。いづれも名目である。「廷にして叱す」「廷にしてはづかしむ」「廷にしてあらそふ」「衆はづかしむ」と読むのはよくない。「廷叱す」「廷辱す」「廷爭す」「衆辱す」と読まなければならない。そもそも二字三字が連属して名目となった詞を倭語で読んではならない。倭語で読めば名目の意を失する。かならず音で読んで、名目であることを記憶しなければならない。釋氏の徒が佛書を読む場合は、倭訓がすくなく、音で読むことが多いので、名目の類はその本旨を失せず、学びはじめのものでも記憶することができる。儒者が書を読む場合は、先輩から倭語を用いるように指導されるので、華語の本旨を失することがとても多い。この弊害を改めるのでなければ文理に達することはありえない。

○樂記に「斯須」①という字があり、中庸に「須臾」②という字がある。同じく暫時という意味であるが、詞が異なれば音で読んでその字を記憶するのがよい。先輩のように、すべて倭語を用いて「しばらく」と読んでは、「斯須」と「須臾」との詞の相違を区別しようにもしようがなく、その字を記憶するのもむつかしい。音で読むのと倭語に読むのとの得失は以上のとおりである。これらの例から、それ以外は類推して知ることができる。

①『禮記』樂記「君子曰、禮樂不可斯須去身。致樂以治心、則易直子諒之心油然生矣」。
②『禮記』中庸「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教。道也者、不可須臾離也、可離非道也」。

○書を読むのは、文字を識り、義理を明らかにするためである。しかし文字を識り、義理を明らかにするには、まづその文句を記憶するのでなければ明らかにすることはできない。だから書を読むものは、その文句を記憶することを第一のつとめとする。古人の一篇の文章を看るのにも、眼が全篇にゆきわたらなければ、その文の大意さえ理解することができず、ましてや篇章句字の法の精密細微なところをどのようにして見分け会得することができようか。一首の詩は短い物であるが、いいかげんに看過してはその意に通じることはできない。かならずその語句を諳誦し、反覆吟咏してはじめてその意味の存在するところがわかる場合がある。詩文ですらそうである、ましてや一冊の書を読むときに、ここを看ているときにはあちらを忘れ、最後を読んでいるときには最初を忘れるようでは、どうしてその書の大義に通じることができようか。かならず一冊の書を貫いて、その文を記憶し、前後を思いあわせてはじめて事の始末も義理の落ち着き先も理解することができるのである。これはたとえば高い山の上から下を見下ろすようなものである。一目で見わたすことができるので、地理の曲折がはっきりと見える。書を読むものは、このような意識で書の始めから終りまで一目で見わたすようでなければならない。しかし目を書の始

終にわたすということは容易なことではない。かならずまづその書を熟読し、その語句を諳誦記憶し、一冊の書がはっきりと胸中に存在してはじめて書巻を開くたびにどの部分であっても我が眼が書の始終におよぶことができるのである。さて諳誦記憶は、熟読によって実現する。熟読せずに急に記憶しようとして、今日一語を記憶し、明日一句を記憶するようなやり方では、すみやかに功をなしとげることはできるが、すみやかに得たことはすみやかに失うものである。ただ何の意識もせず玩読し、それを数十回繰り返せば、いつとなく口をついてでて、自然にその文句を諳誦することができる。このようにして記憶したものは、いくら時がたっても忘れない、これを「熟読」という。これが読書の要法である。この法を用いるには、古来の読みのような、むつかしい倭訓、むつかしいテニヲハをはぶいて、簡易に学ばなければならない。「簡易」とは、事がすくなく簡単なことである。前にいったように、音で読んで通じるところは、倭語を用いずに音で読む、これが簡易の法である。そもそも儒生が書を読むのは、中華の文章を学んで聖人の道を明らかにするためであり、倭歌倭文の用に立てようとするのでなければ、倭訓を省略して誦読に便利で記憶しやすいやり方を採用しなければならない。

○中華の人が書を読むとは、書を看ることをいう。別に「看書」という言葉はあるが、俗語である。雅言には「読書」だけしかなく、「看書」という言葉はない。この国の人は、読書と看書を二つに分けて、読書は読書、看書は看書として、同じ事とみなしていない。これは国俗のあやまりではあるが、この国の習慣では、読むことと看ることは実は同じでないところがある。その理由は、倭語の読みには顛倒があり、助語を読まずにのこすからである、これが漢語とは異なる点である。だから口で読むだけでは、漢文の意味は理解しがたい。口で倭語の読みをしたとしても、目ではその文字を看て、その上下の位置を分別し、助語辞のひとつひとつまで目をつけて仔細に看て、心ではその句法字法にさまざまな変化異同があることを考えながら、中華の人が音で上から順に読みくだす心持ちになって、漢文の条理血脈を認識しようとしなければならない。これが書を看るということである。ただ読むというだけでは、このような事がないので、その益も少ない。これが倭漢の読書の異なる点である。

○倭読には諸家の点があり、たがいに異同がある。学ぶものは往々にしてその点の是非を争う。争う内容には道理がないわけではないが、結局倭語の上における是非であるにすぎず、優劣を定める必要はない。しっかりと学問しようとおもうものは、これに深くとらわれてはならない。点はとりあえずおいておいて、とにもかくにも読むことを優先しなければならない。ただ点に目をつけず、本文に目をつけて、中華の人の読法のように上から順に読みくだす意識でその文義を尋求しなければならない。だから読書には点がないテキストを用いたほうがよい。もし点がないテキストを読むことができない初学のものは、とりあえず点のあるテキストを用いてもよい。その点のあるテキストは、諸家のうちのいづれのテキストでもよい。魚を得るまでの筌なので、いづれの点であっても倭読を習うということではおなじである。その本旨を会得すれば、点は読む人の心の中に存在する。その究極の目的をいうと、点を捨てて中華の人の心になりきり、心と目を用いて漢語の読みをすることであり、さもなければ真の読書とはいいがたい。これが読書の第一義である。

倭讀要領卷中

『倭讀要領』巻中原文（平假名校訂）

凡例

一、本譯註は『倭讀要領』享保十三年刊を底本とし、原文の片仮名を今の人が読みやすいように平仮名に直した。

一、原文は読点のみであるが、文意にしたがって句読点に直す。

一、標題、引用文などは返り点、送り仮名を附しているが、パソコン表記上の制約により省略した。書き下しは現代語訳の部を参照されたい。

一、語の左右にルビがあるものがあるが、左訓は語の下に〔　〕を附して下に入れる。

倭讀要領卷中

信陽太宰純德夫撰

倭語正誤

倭語は萬葉集を本として、其餘の古書を以て參考して、雅俗の分を知り、古今の異を辨ふべし。名物は和名集を本とす。然れども吾國の古書も簡册頗多ければ、初學の士の究覽るべきにあらず。且先時師の敎に遵て、習讀すべし。其中に近世誤讀て、字義を失へる者あり。今其尤き者を擧て、初學に示すこと左の如し。

猪　豬と同じ。猪といひ、豕といふ、一物なり。倭語にゐといふ。俗にはぶたといふ是なり。此字をゐのししといひ、又ゐのこといふ、皆非なり。ゐのししは野猪なり、ゐのこは豚なり。小豕を豚といふ。猪豕の二字をば、只ゐと讀べし。

蒲　倭語にかまといふ。清ていふべし。俗にはがまと濁ていふ。朗詠集に、刑鞭蒲腐て螢空く去るといふ句を、清て讀習はせり。又近江の國の蒲生郡をかまふといふも、清て呼ぶ。又源範頼を蒲御曹子と稱す。蒲の字をかばと呼ぶ。凡讀書にはかまと讀べし。

豚　狘豘と同じ。説文に小豕也と註せり。故にゐのこと讀む。倭語當れり。豕猪の二字を、ゐのこと讀むは誤なり。

圓　倭語にまとかといふ。との字を濁て、まどかといふは訛なり。

裳　衣をころもといひ、裳をもといふ。俗儒もすそと讀むは非なり。もすそは、裾の字、裔の字、又裔の字なり。裳はもすそにあらず。

豕　卽猪なり。俗にいふぶたなり。ゐと讀べし。ゐのこと讀べからず。ゐのこは豚なり。前の猪の字の下に見えたり。

灑　洒と同じ。そそくと清ていふべし。くの字を濁て、そそぐといふは訛なり。

乃　廼と同じ。辭に用たる處にては、すなはちと讀べし。俗儒いましと讀むは誤なり。いましは、吾國の古言に、なんぢをいましといふ。乃の字を汝と訓ずる故に、古書にいましと讀めるは、必汝の義なり。乃の字のみにあらず。汝の字をもいましと讀めり。又いましいと讀む者あり、殊に鄙俚なり。

槳　此字をかぢと讀むは誤なり。字彙に、縱なるを櫓と曰ひ、横なるを槳と曰ふと註せり。槳は櫓の類にて、船の傍に在るを槳といふ。櫓の字に倭訓なければ、槳の字にも倭訓なし。若强て倭語にいはんとならば、さほといふべし。然れどもさほといへば、櫂篙に混ず。櫂は棹と同じ。木のさほなり。常にかいといふ是なり。篙は竹のさほなり。櫂の字をさほと讀むも、篙より移りたる倭語なり。槳は櫓の類なれば、强て倭訓を施しがたし。音に讀んにはしかじ。

貢　倭語にみつきといふ。清ていふべし。きの字を濁て、みつぎといふは訛なり。

避　さくると讀べし。さくるとは、常にいふよくる義なり。我よりよけてのきさるなり。俗儒さると讀むは非なり。さると讀むは、辟の字なり。辟の字に多音多義あり。其中に音壁なるは、除也屏也と註して、驅〔かり〕除〔はらひ〕屏〔しりぞけ〕去〔さる〕の義なり。本草に、雄黄、邪を辟る、犀角、寒を辟るといへる類是なり。倭語にさると讀み、又しりぞくると讀む。音闢なるは、闢と同じ。孟子に土地を辟く、行て人を辟くといへる類是なり。倭語にひらくと讀む。壁と闢と、倭音同くして、華音別なり。音避なるは、避と同じ。經傳に去聲と註せるも、避と同じ。論語に賢者世を辟くといへる是なり。さくると讀なり。辟の字、此三音其義まぎれやすし。よくよく辨別すべし。俗儒音義を審にせず、一槩にさると讀むは誤なり。

彘　豕也と註せり。豕の別名なり。ゐと讀べし、ゐのこと讀べからず。

背　身の北を背と曰ふ。身の後なり。倭語にせといふ是なり。俗儒せなかと讀むは誤なり。脊の字をせなかと讀む。せなかとは、背中の義なり。膂は脊骨なり。せぼねと讀む。

ト　龜を灼をトといふ。著を揲を筮といふ。トす筮すと音に讀べし。うらなふと讀べからず。占の字をうらなふと讀む。うらなふといふは、卜筮に通ず。汎き辭なり。

躍　をどると讀む。古き讀に、此字をほどはしると讀ことあるは非なり。迸の字をほどはしると讀む。迸は、走逸也と註して、譬ば癰腫の處を擠せば、膿血走り出る、是をほどはしるといふ。躍は下よりをどり上るなり。水の擊れてをどり上るも躍なり。迸と躍と、義同からず。謬訓ずべからず。

迫　せまると讀べし、せむると讀べからず。せまるといふは、近づく意なり。逼の字もせまると讀む。逼迫の二字同義なり。

食　此字本入聲、職の韻に入る。漢音しよく、呉音じき。くらふなり、くひものなり。又去聲寘の韻に入る。倭音し。飯也と註して、いひのことなり。いひは、めしなり。又くらはしむると讀む。くはすることなり。此時飼の字と通ず。又やしなふと讀む。卽くはする義なり。常に飲食といふは、のみくらふといふ義、又のみもの、くひものといふ義なる故に、食の字を入聲に讀なり。俗儒いんしいと讀むは誤なり。

楫　檝と同じ。短棹なり。又橈といふ。棹は、かいなり。楫は、短きかいなり。書中にてはさほと讀べし。俗儒かぢと讀むは誤なり。かぢは、柁なり。橈も是と同じ。かぢと讀べからず。

夾　はさむと讀べし。路を夾む、岸を夾むといふは、兩傍に在る義なり。夾み攻む、夾み擊つといふは、兩傍より攻擊なり。さしはさむと讀べからず。挾の字をさしはさむと讀む。挾は、挾持なり。

右倭語の其字義を失へる者、大略此類なり。餘は具陳しがたし。學者心を潛て尋思せば、是非自見ゆべし。又童蒙書を讀む時、倭語のてにをはに於ては、全く心を用ひず。只時師の口授に從て習讀する故に、多く差謬を致す。凡倭語は、てにをはを以て其義を成就す。てにをはを誤れば、文理に違て、大義遂に乖く。眞に是細故にあらず。されば今の學者、若華音の讀をなさば、てにをはを論ぜずして可なり。倭語の讀は、てにをはを用ひざることを得ず。深く拘はるに足らずといへども、草草にして鹵莽を致すべからず。

倭讀正誤

近世の俗儒論語を讀むに、其如示諸斯乎の句を、それ斯を示るが如きかと讀て、諸の字を讀まず。上に其説を知れる者の天下に於るやとあり。諸の字はすなはち上句の天下を指ていへるなり。禘の説を知れる者の天下を治るは、何の難きことも無く、四海九州を掌の上に置て、一目に視るが如くならんといふ義なり。されば此句をば、それ諸を斯に示るが如けんかと讀べし。凡諸の字を句中に置くは、多くは之の字の義にて、指す所ある詞なり。遺さず讀べきなり。其の字は期望する詞にて、事をつもりはかりていふ時、それと置く字なり。上に其とある處は、下にて云云せん、云云ならんと讀べきなり。俗儒多くはこれを知らず。中庸にも治國其如示諸掌乎の語あり、是に准じて讀べし。

○遂事不諫の句を、とげんじことをば諫めずと讀む、とげんじといふてにをはは非なり。とげんじは、とげにしなり。にしといふは、倭語にて了畢〔おはる〕の詞なり。とげにしとは、とげおはりしといふ詞なり。今本文に遂事といふは、朱註の意は、事いまだ成就せざれども、其勢已ことあたはざるをいふなり。されば遂事の二字を、倭語にいはば、とぐべきことはと讀べきなり。讀む者これを思はず、上の句をなりんじ事をばと讀たるうつりにて、此句をとげんじ事をばと讀むは、てにをはを知らざるなり。今此三句の上の二字を、倭語を用ひずして、成事は説かず、遂事は諫めず、既往は咎めずと讀む。簡潔にして其義を失はず。

○不以其道得之の句を、其道を以てせずしてこれを得ばと讀むは誤なり。此不の字は、非の字の如し。富貴は人の好みねがふことなれども、富貴になるべき道を以てこれを得たるにあらざれば、處らず、貧賤は人の惡みきらふことなれども、貧賤になるべき道を以てこれを得たるにあらざれば、去らずとなり。不の字得之の字まで に被る。不處不去の不の字と相喚應〔よびこたふ〕するなり。然れば上の句をば、

其道を以てこれを得ざればと讀べし。不の字をあらざればと讀むも可なり。凡不の字には、非の字の義なることあり。又無の字非匪の字にも、不の字の意なることあり。夙夜解ず、彼の交り敖らずといふが如きは、匪の字皆不の字の意なり、あらずと讀べからず。

○造次必於是、顚沛必於是を、造次にも顚沛にもと讀むは誤なり。仁者は、造次も顚沛も、必仁の上にて造次顚沛するといふ義なり。造次も顚沛もと讀べきなり。

○吾亦欲無加諸人を、吾も亦人に加ふることなしとほつすと讀む、なしとほつすといふてにをは惡し。なからんことをほつすと讀べし。又二つの諸の字をも、これをと讀べし。俗儒凡諸の字を讀まず。

○夫子之言性與天道を、夫子のことと讀むは誤なり。此八字一句なり。夫子の性と天道とをのたまふはと讀べし。俗儒句讀を知らず。亦言の字の活字なることをも知らず。

○堯舜其猶病諸を、堯舜もそれなをやめりと讀むは誤なり。それなをやまんかと讀べし。凡諸の字句末に在るは、皆疑ふ詞なり。小爾雅に諸は之乎也とあり。之乎の二字を合せたる意なり。山川其舍諸は、それこれをすてんやなり。有諸は、これありやなり。韞櫝而藏諸は、これをかくさんやなり。求善賈而沽諸は、これをうらんやなり。吾得而食諸は、これをくらはんやなり。堯舜其猶病諸とは、子貢が問へる所の如きは、仁人の事のみにあらず、すなはち聖人の天下を治たまふ上の成功なれば、古の堯舜とても、猶恐くは是を病としたまはんかとなり。後の子路に答たまふ語も、此意なり。其の字山川其舍諸の其と同じ。皆期望の詞なり。されば上に其の字ありて、下に諸の字あるは、皆つもりはかりていふ詞なり。然るを其なをやめりと讀ときは、決する詞となりて、上にそれといへるに、てにをは合はず。

○久矣吾不復夢見周公を夢の字をゆめにだもと讀む、大に非なり。孔子少きより周公を慕たまふ故に、時時夢に周公を見たまひしが、老衰甚くして、いつのほどよりか、復とふたたび周公を夢みたまはぬことを歎て、かくのたまへるなり。されば此句を倭語に讀まば、久く吾また夢に周公を見ずと讀べし。夢にだもと讀ときは、孔子少き時は、周公を親見したまひしが、今は夢にも見たまはぬといふになるなり。親見とは、正しく相見することなり。五百年前の周公を、孔子何として親見したまはんや、眞に笑ふべし。

○不憤不啓、不悱不發を、憤せずんば啓せず、悱せずんば發せずと讀む、てにをは失せり。憤せざれば、悱せざればと讀べきなり。憤せずんば悱せずんばと讀まば、啓せじ發せじと讀べし。或は啓せざれ發せざれとも讀べし。かくの如くならざれば、てにをは合はず。又近時一儒師の讀に、憤せざる啓せず、悱せざる發せずと讀む。凡そ則の字ある處にては、ればといふてにをはを附け、則の字なき處にては、ればといふてにをはを附けざる家法にて、義理を論ぜず、只則の字の有無を視る。今此語の如き、句中に則の字なき故に、憤せざる悱せざると讀て、ればといふてにをはを用ひざるなり。是文法を曉らず。古人字を下すに活法あることを知らざるなり。固陋の至り、捧腹に堪えず。

○不在其位、不謀其政を、其位にあらずんば、其政を謀らずと讀む、是亦てにをはを失せり。其位にあらざればと讀べし。又孟子の不奪不饜を、うばはずんばあかずと讀むも、てにをはの例にあらず。うばはずんばあかじ、或はうばはざればあかずと讀べきなり。先輩てにをはを知らずして、かくの如く讀めり。

○韞櫝而藏諸、求善賈而沽諸を、櫝に韞めて藏したり。善賈を求て沽めやと讀む、誤なり。かくさんやうらんやと讀べし。此二句は、子貢二端を設て問へるなり。されば二句の末に皆諸の字あるは、疑ふ詞なり。沽之哉を、うらめやと讀むも、誤なり。哉は、嗟嘆の詞なり。孔子の意は、美玉ならば、善賈を待て沽るべきこと、勿論なる故に、必沽らんといふことを、甚くいはんとて、これを沽んかな、これを沽んかなと、重てのたまひしなり。此哉の字は、左傳に可なるかな、諾なるかな、君王に與へんかな、君王を畏れんかなといひ、孟子に膾炙なるかなといへる哉の字と同じ。皆人の言に深く應ずる詞なり。然るをうらめやと讀ときは、疑ふ詞になりて、答語にならず。子貢が沽んやと問たるに當りて、これを沽んかなと答たまへるを、沽諸をも沽之哉をも、倶にうらめやと讀む故に、問と答と倭語にて混同す

るなり。先輩文義に昧きことかくの如し。

○吾以子爲異之問、曾由與求之問を、吾なんぢを以て異なる問とす、曾由と求とが問なりと讀む、非なり。吾子を以て異を問んとす、曾由と求とを問ふと讀べし。以爲の二字は、中間に字を置ても、おもへらくといふ義なり。夫子の答たまふ意は、我吾子が我に物を問んとするを見て、吾子必他の事を問んとおもへり、然るにすなはち思ひの外に、由と求とが事を問ふは、何故ぞとなり。凡上に在べき字を、下に置く時、其中間に之の字を置く、是文法なり。此處の二つの之の字是なり。先輩文法に昧し。

○子帥以正を、子ひきいて以てたださばと讀む、非なり。子ひきゆるに正を以てせばと讀べし。帥以正は、正を以てひきゆるといふ意を、文法にてかくの如く書たるなり。堯舜、天下を帥るに仁を以てす、桀紂、天下を帥るに暴を以てすといへると、同字法なり。堯舜天下をひきいて以て仁す、桀紂天下をひきいて以て暴すと讀て可ならんや。先輩字法を知らず。

○草上之風を、草に風をくはふればと讀む、非なり。草これに風をくはふればと讀べし。草といふ者は、これに風をくはふれば必のべふす者なりといふ義なり。若此文上草風とあらば、草に風をくはふればと讀べし。今草上之風とありて、之の字すなはち草を指ていへるなれば、是を讀まずして置べきにあらず。

○選於衆を、衆をゑらんでと讀む、非なり。衆にゑらんでと讀べし。於の字を置たる意は、衆をゑらぶといふにあらず、衆人の中より選出して、皐陶伊尹を擧たまひしといふことなり。

○鄉人皆好之何如、鄉人皆惡之何如を、鄉人に皆よみんぜらればいかん、鄉人に皆にくみんぜらればいかんと讀む、非なり。鄉人皆これをよみせばいかん、鄉人皆これをにくまばいかんと讀べし。一鄉の人が、一同に皆この人をよみし、皆この人をにくまばいかにといふ意なし、本文に於て、よみせられ、にくまるるといふ意なり。字法見つべし。下の文不如鄉人之善者好之、其不善者惡之をも、よき者にはよみんぜられ、其よからざる者にはにくまれんにはと讀む、非なり。鄉人のよき者これをよみし、其よからざる者これをにくむにはしかずと讀べし。先輩凡之の字を讀まざる故に、かくの如く謬れり。其實は字法を知らざるによりてなり。

○豈若匹夫匹婦之爲諒也自經於溝瀆而莫之知也を、あに匹夫匹婦の諒をするが、みづから溝瀆にくびれて、知らるることなきがごとくならんやと讀む、非なり。あに匹夫匹婦の諒をする、溝瀆に自經して、これを知ことなきがごとくならんやと讀べし。自身くびをくくりて死するを、自經といふ。これを知ことなきとは、外人これを知る者なきといふ意なり。後漢書には、莫の字の上に人の字あり、文義尤明白なり。知らるることなきと讀まれず。

○是栖栖者與、無乃爲佞乎を、是栖栖する者か、むしろ佞をするかと讀む、非なり。是栖栖たる者か、すなはち佞をすることなからんやと讀べし。微生畝が問の意は、孔子何をしたまふぞ、是栖栖といそがはしく功名を求る者か、それならば佞をするといふ者にはなるまじきやと難じたるなり。無乃の二字、いづれも此意なり。例を考て知るべし。俗本の如く讀めば、二句倶に問語になりて、無乃の詞の義を失ふなり。

○鄙哉硜硜乎、莫己知也、斯已而已矣を、いやしいかな硜硜乎として己を知ことなきこと、これ已なんのみなりと讀む、非なり。いやしいかな硜硜たること、己を知ことなくは、これ已んのみと讀べし。鄙哉硜硜乎の五字是一句なり。磬聲の硜硜たるをいやしめたるなり。上の文の有心哉擊磬乎と、句法同じ。莫己知也、斯已而已矣の二句は、孔子の已ことあたはざるを譏れる言なり。硜硜の字と相あづからず。俗儒鄙哉の二字を、莫己知也の句までにかけて、硜硜の二字を、莫己知也の意となして讀む故に、大に文義を失ふなり。實は句法を知らざる故なり。

○君子疾没世而名不稱焉、没世を、世をおふるまでと讀むは誤なり。世をおへてと讀べし。終身をば、身をおふるまでと讀む、一生を盡すまでのことをいふ。没世は、身没して後をいふ。終身と同からず。没は、かくるる意なり。没世とは、斯世になくなることをいふ。大學に此以て世を没へて忘れざるなりといへるも、前王没したまひて後、民のいつまでも其德を忘れざることをいへり。此章も人一生の内に、功德

を立ることなくして、死して後、其名世間に稱せられざるは、君子の疾む所なることをいへり。俗儒は没世と終身とを混同して讀む。

○不學詩無以言を、詩を學びずんば、以てものいふことなしと讀む、てにをはを失せり。詩を學びざれば、以てものいふことなしと讀べし。或は詩を學びずんば、以てものいふことなけんとも讀べし。下の文の不學禮無以立も此に准ず。

○不曰堅乎、不曰白乎を、堅きをいはずや、白きをいはずやと讀む、非なり。堅しといはずや、白しといはずやと讀べし。此曰の字、意輕し、言の字謂の字の意にあらず。孟子の何必曰利をも、何ぞ必しも利をいはんと讀むは非なり。何ぞかならず利といふと讀べし。孟子梁王の吾國を利することあらんかといへるを各めて、王何ゆへに開口の初に、かならず利とはのたまふぞといへるなり。俗儒曰の字と言の字との辨別を知らず。

○今也或是之亡也を、今はこのなきことありと讀む、誤れり。今也或は是をうしなへりと讀べし。或の字に有の義あれば、是をうしなふことありとも讀べし。此亡の字は、有亡の亡にあらず、失亡の亡なり。本亡是とあるべきを、亡の字を下に置く故に、中間に之の字を入れたり。

○本之則無如之何を、本のすなはちなきことこれをいかんと讀むは誤なり。これを本づくれば、すなはちなきこと、これをいかんと讀べし。これを本づくるとは、其本を求るなり。

○窺見室家之好を、室家のよしみをうかがひみると讀むは誤なり。うかがつて室家のよきを見ると讀べし。うかがふとは、のぞくことなり。好は、美好の好なり。よしみと讀まず。よしみと讀むは、去聲の時なり。室家の好きとは、家内の模様よきことをいふ。牆の高さ僅に肩だけほどにて、やづくりも淺まなる故に、牆外に立てのぞけば、家内の模様よきことが、そのまま見らるるとなり。牆は、此方のついぢなり。

○大學の視而不見、聽而不聞を、俗儒みれどもみえず、きけどもきこえずと讀むは誤なり。みれどもみず、きけどもきかずと讀べし。視は、こなたよりみるなり、見は、みつくるなり、聽は、こなたよりきくなり、聞は、ききつくるなり、目はみる役なれば、物あれば必これをみれども、心他にゆきて、ここの事にうつらざれば、太山をもみつけぬなり。耳はきく役なれば、聲あれば必これをきけども、心他にゆきて、ここの事にうつらざれば、雷霆をもききつけぬなり。みえずきこえずといへば、あなたよりみえずきこえずといふ義になる、本文の意にあらず。

○中庸の失諸正鵠、反求諸其身を、正鵠を失すれば、反て其身に求むと讀むは非なり。これを正鵠に失すれば、反てこれを其身に求むと讀べし。二つの諸の字は、皆之の字の義なり。射の道を指ていふ。失諸正鵠とは、正鵠の的の處に至てゐはづせばといふ義なり。正鵠を失すればと讀めば、諸の字を置たる意に背くなり。

○妻子好合を、妻子よくあへりと讀むは誤なり。好合すと讀べし。好は去聲にて和好の義なり、相よみするなり。よくと讀べからず。よくと讀めば、美好の義になる。朱註の意にあらず。俗儒音註を見ざるなり。

○孟子の君爲來見也を、君來り見ることをすと讀むは誤なり。君ために來り見ると讀べし。樂正子が魯君に告せしによりて、君これが爲に來て孟子を見るとなり。爲の字朱註に去聲とあり。俗儒音註を見ず。

○今言王若易然を、今王たること然しやすきがごとしといはばと讀む、非なり。今王をいふこと易きがごとく然るときはと讀べし。言は、語るなり、談論する意なり。王道は行ひやすからぬことと、人皆おもへるに、今孟子の王道を談ずるは、甚易き事の様に聞ゆるときは、文王の如きは、法とするに足らざるかと難ぜるなり。王をいふとは、王道を語るなり。王たることと讀めば、活字になりて、去聲なり。此王の字は平聲そのままなり。然は、つけ字なり。此類の然の字、孟子の中に多く有り。

○猶可以爲善國を、猶以て善をすべき國なりと讀む、非なり。猶以て善國たるべしと讀べし。俗儒句法を知らず。善國は、新國、平國、治國、亂國、樂國、仕國などいふが如し。

○吾爲之範我馳驅を、吾これが爲に範してわれ馳驅すればと讀む、非なり。吾これが爲にわが馳驅を範すればと讀べし。我が馳驅を法度の如くすればといふ義なり。

○其妻妾不羞也を、其の妻妾をはぢずと讀む、非なり。其妻妾をといふ、をのてにをはを去べし。此六字は、下の而不相泣者幾希矣の八字を連ねて一句なり。者幾希矣の四字、其妻妾より以下を承く。世の人の富貴利達を求るは、皆彼齊人に異なることなければ、其妻妾たる者これを見て、竊にはぢずなかざる者すくなしとなり。はぢずといふ羞るは、妻妾が羞るなり。羞は、おもはゆきなり、人に面をむけがたき意なり。先輩句法を知らず、註意を解せざる故に、かくの如く誤れり。

○舜避堯之子於南河之南を、舜堯の子に南河の南にさると讀む、非なり。堯の子を南河の南にさくと讀べし。さくるとは、よけて其處をはづす意なり。堯の子にといふ、にのてにをは誤れり。

○白羽之白也、猶白雪之白、白雪之白、猶白玉之白與を、白羽の白は、猶白雪の白のごとく、白雪の白は、猶白玉の白のごときかと讀む、大に非なり。或は羽を白しとするの白は、雪を白しとするの白のごとく、雪を白しとするの白は、玉を白しとするの白のごときかと讀む。先輩の讀に勝れる樣なれども、是亦非なり。羽の白きを白しとするは、雪の白きを白しとするがごとく、雪の白きを白しとするは、玉の白きを白しとするがごときかと讀べし。下の章の白馬之白、白人之白、長馬之長、長人之長も、此と同じ。其下の長楚人之長、亦長吾之長の二句をば、楚人の長を長とし、亦吾が長を長とすと讀む、是なり。三處の文、同字法なり。若前の兩處の舊讀の如くならば、長楚人の長、亦長吾の長と讀て可ならんや。是一笑すべし。字法を知らざるによりて、箇樣の誤あり。

○豕交之也を、ゐのこのまじはりなりと讀み、獸畜之也を、けだもののかふなりと讀む、非なり。これを豕交するなり、これを獸畜するなりと讀べし。豕交するといふは、人をぶたとおもひてまじはるなり。まじはるとは、あひしらふ意なり。獸畜するといふは、けだものの如くおもひてやしなふなり。此詞、之に君事す、之に父事す、之に兄事す、之に師事す、之を弟畜すといへると、字法同じ。君事するとは、其人を尊びて、君とおもひてつかふるなり。父事するとは、人を敬ひて、父の如くおもひてつかふるなり。兄事するとは、兄の如くおもひてつかふるなり。師事するとは、師なりとおもひてつかふるなり。弟畜するとは、弟の如くおもひて、かいはうするなり。史記の范睢が傳に、兩黥徒をして夾て之に馬食せしむといへる、馬食の字、又此字法なり。馬の食ふ物を、馬にくはする如くにしてくはせたる故に、之に馬食すと書たるなり。食は去聲、音嗣、くらはしむるなり。

○周易の敬以直内、義以方外を、敬これをもつて内を直くし、義これをもつて外を方にすと讀む、非なり。以の字をば、只もつてとばかり讀べし。論語に、義以て質と爲し、禮以て之を行ひ、孫以て之を出し、信以て之を成すといへる、同字法なり。上を承たる字なるに、これをもつてと讀こと、むつかしく厭はしきなり。他處に在るも、此類皆然なり。

右四書の中にて、俗儒の讀の大に誤れる處を舉ぐ。四書は近世學者の必習讀む所にして、薩摩の僧文之よりこのかた、諸家の本ありて、世に行はる。其中に山崎氏の本の如きは、其教を受る者にあらざれば、これを用ひず。他の諸家の本は、海内に流布して、凡兒童の書を讀む者、得るに任てこれを用て、時師の句讀を受る故に、謬誤相承て、其非を知らず。茲に姑俗本の中の、誤讀て、其義を失へる處を舉て、初學に示す。餘は一一に指摘しがたし、心を潛て其義を求て、自得すべし。鹵莽にして俗儒の謬を承ることなからんこと、是學者の用心〔こころがけ〕なり。

○所以の二字を、ゆへんと讀こと、古來の習なり。ゆへんは、ゆへにといふことなるを、この字をはねたる者なり。昔倭語の讀を始ける人、善く思惟して、此二字をゆへんと讀めり。されば文の中にて、ゆへんと讀て通ずる處多し。然れども一槩にゆへんとばかり讀べからず。以て云云する所と讀て可なる處もあり。又下より上りてゆへんと讀まずして、句の上にてこのゆへに云云と讀て宜き處もあり。所以の二字に此三樣の讀あり。其處に臨て、上下の文勢を考て、宜きに隨ふべし。山崎氏はゆへんと讀み、このゆへにと讀ことをせず、一槩に以て云云する所とばかり讀む、固なるに似たり。

○若夫の二字をば、もしそれと讀む處多し。又かの云云のごときと讀て好き處あり。

下の文を考て、宜きに隨ふべし。

○以爲の二字をおもへらくと讀ことも、古來の習なり。此二字に謂の字の意ある故に、吾國の人、義を以て讀たる者なり。或は下より返りて、云云とおもへりと讀むも同じ。或は字のままに、以て云云とすと讀て好き處もあり。其意は異なること無し。山崎氏はおもへらくと讀ことを嫌て、以て云云とすとばかり讀む、是亦固なり。

○至若の二字を、しかのみならずと讀こと、古來の習なれども、其義的當せず。しかのみならずといふは、事の加はることをいふ詞なり。至若は、事の極まる所を推て、しかじかのごときまでに至るといふ意なり。然れども至若の字のある處は、其下の語意の串くところ必長し。されば其語意の盡る處より、上へ返りて、云云のごときに至ると讀みかたきことある故に、此二字を始に讀て置んとするとき、外にいふべき詞なき故に、せんかたなくして、しかのみならずと讀たる者なり。是亦古の人の意を以てつけたる倭語なり。初學これを知て、其義に惑ふべからず。至如も至若と同じ。

○句首に若の字あれば、もしと讀み、如の字あれば、下より返りて、ごときと讀むは固なり。若と如と、字義大に同じ。もしと讀み、ごときと讀む、皆可なり。其處の語意を詳にして、何れにても宜きに隨ふべし。字の別なるに拘はるべからず。

○而の字、則の字は、皆上を承て下へ送る詞なり。故に而の字あれば、上の句を云云してと讀み、則の字あれば、上の句を云云すればと讀む。是通途の事なり。或は而の字の上にて、てといひがたく、則の字の上にて、ればといひがたき處あり。拘泥すべからず。古文に至ては、殊に尤拘はりがたし。而の字を用べき處に、則の字を用ひ、則の字を置べき處に、而の字を置く類の事多し。何ぞ常の字義に拘はるべけんや。山崎氏は字義に拘はりて、而の字に上にては、必てといひ、則の字の上にては、必ればと讀む。固陋甚し。凡古人の助字を用ること、活法ありて、一定せず。而則の二字のみに限らず、何れの字も皆然なり。一法に執滞すべからず、其處の語意を詳にし、上下の文を考て、義の通ずる樣に讀べきなり。此法を知らざれば、古文古書竟に讀れず。

○大凡、大抵、大都、大略、大約、大要、大較、大槩、大率、此等の詞、其意皆相似て、大に異なること無し。皆大意を括ていふ詞なり。倭語を用て、或はおほよそと讀み、或はおほむねと讀こと不可なり。皆音にて讀べし。此數多の詞、大意同けれども、字各異なる故に、其義も亦少の不同あり。然るを倭語に讀めば、混同して別なきのみならず、其字體をも記憶しがたし。學問の便宜にあらず。

○然の字と而の字と、其義相通ず。而の字に然の字の如くなる處あり、然の字に而の字の如くなる處あり。此兩字、しかうしてと讀む處あり、しかれどもと讀む處あり、しかるにと讀む處あり、是亦一定せず。山崎氏然の字をば、しかるにとばかり讀む。亦固滞の失なり。又而の字然の字を單に一字用る處是多し。或は然而と連屬して用ることあり。別に深き意義あるにあらず。

○而の字と以の字と對して用ることあり。楚詞に是多し。二字異義なし。以を而に換へ、而を以に換ても、其義皆通ず。又而の字を之の字の意に用ることあり。左傳に有威而可畏、謂之威、有儀而可象、謂之儀とあるを、威ありて畏るべき、これを威といふ、儀ありて象るべき、これを儀といふと讀めども、此二つの而の字は、之の字の意なり。威の畏るべき者あるを威といひ、儀の象るべき者あるを儀といふと意なり。古書の中に此例多し、知らずはあるべからず。

○俗儒の輩、則の字をときんばと讀む、非なり。ときんばは、ときにはなり。上の句に云云するときはといふ意ある處は、下の句に多くは則の字ありて、すなはちと承ること、通途の文法なり。則の字は、すなはちと讀て、上にときはといへる詞を承て、下へ送る詞なり。則の字にときはといふ義あるにはあらず。されば文に句讀するに、則の字の上に句讀して、則の字をば下の句に屬するなり。若ときんばと讀めば、上の句に屬す。

○也の字は、倭語になりといふ詞にて、句末にては、なりと讀て好き處多し。然れども亦なりと讀がたき處も多し。深く泥むべからず。山崎氏は此字ある處にては、必なりと讀む故に、倭語にては却て累となることあり。凡中華と吾國と、人の言

語元來別なり。然るに中華の語を、悉倭語となして讀んとする故に、其義を失ふこと多し。いかほど巧に讀なしても、漢語を全く倭語となすことは、かなはぬことなり。只大かたに翻譯して、意義の盡しがたき處に至ては、其旨を心に會得すべきなり。是倭讀の大法なり。也の字句末に在て、上の文を釋する詞に用たる處は、必なりと讀む。大學に切するが如く磋するが如しとは、學を道ふなり。琢するが如く磨するが如しとは、自ら脩むるなりといふが如き、也の字上の者の字に應じて、皆上の文を釋する詞なり。周易の大傳に、潛龍用ること勿れとは、陽、下に在ればなり。見龍田に在りとは、德の施し普きなりといへるが如きは、上に者の字なければども、下に也の字あるは、上の文を釋する詞なり。春秋傳に、公、戎に潛に會す。惠公の好を修むるなり。鄭人、衞を伐つ。公孫滑が亂を討するなりといへるが如きも、同文法なり。皆經文を上に擧て、下の句これを釋す。傳文の體なり。俗儒これを知らず、公戎に潛に會して、惠公の好を修む。鄭人衞を伐て、公孫滑が亂を討すと讀む。經文と傳文とを連合して、釋する意見えず。宋人、鄭を伐て長葛を圍む。以て郛に入るの役に報ふなり。公、莒人と、浮來に盟ふ。以て紀の好を成すなりといへるが如きも、同文法なり。此文には下の句の首に以の字ある故に、俗儒以の字を見て、上下をつなぐ詞ぞとおもひて、以の字の下傳文なることを知らず、遂に上の句に連て讀む、大なる誤なり。此等の文にては、也の字をなりと讀まざれば、其義通じがたし。自餘は必しもなりと讀まずともあるべきなり。況や句中に在るは、尤倭語を附けがたし。只助字と見るべし。

○是歲の字を、ことしと讀こと非なり。このとしと讀べし。ことしと讀めば、今歲の義になる。是歲は、今歲の義にあらず。文章の中に、是歲とあるは、必其前に某の年といふこと出たるを、下にて又其年の事を言ふ時の詞なり。是歲といふは、前に出たる某の年を指すなり。前に某の年といふこと出ざれば、是歲といはず。東坡が後赤壁の賦の發端に、是の歲十月の望と書たるは、前赤壁の賦に、壬戌の秋といへるを承て、同年の十月十五日といふことなり。題に後赤壁とあれば、前赤壁に續て作たること明白なり。されば文中に、復赤壁の下に遊ぶといひ、曾日月の幾何にして江山復識る可からずといへる、皆前の賦に對していへるなり。若前の賦なくば、此賦に是歲といふべからず。是月是日の字も此意なり。今月今日といふ義にあらず。禮記の月令に、多く是月也の字を用たるは、毎月の初に、孟春の月、仲春の月といひたる後に、又其月の事をいふとて、是月也と置たるなり。王羲之が蘭亭の記に、是の日や、天朗に氣清み、惠風和暢すと書たるは、發端に永和九年、歲は癸丑に在り、暮春の初といへるに因て、其日を指て是日也と置たるなり。若是日を今日と見て、けふと讀まば、其義を失はん。是歲の字、此意を以て推べし。決して今歲の義にあらず。過し昔の事を言ふに、是歲と書たる處多し。ことしといふ倭語も、本はこのとしといふ義なるべけれども、ことしといへば、今歲のことになり、このとしといへば、今昔に通ずる詞になる。是倭語の習なり。

○往歲、往年、昔歲、昔年、去歲、去年、客歲の類を、一概にこぞと讀こと非なり。こぞといふ倭語は、前一年を指す詞なり。客は、隔の字と同音にて、隔歲といふ義なり。餘は皆前數年に通ずる詞なる故に、こぞと讀ては礙はることあり。且倭語にていへば、字體別れずして、記憶に便ならず。音に讀むを勝れりとす。

○李太白が詩に、解道長江靜如練の句あり。解道を、いふことを解すと讀むは誤なり。解道すと讀べし。解は去聲、廣韻に胡懈の切、曲解と註す。字彙に曉也と註す。領解なり。倭語に合點するといふ意なり。道は、つけ字なり。解道は俗語にて、只領解するといふことなり。知るといふことを、俗語に知道すといふが如し。道の字に意義なし。太白が意は、長江靜にして練の如しといふは、謝玄暉が詩の語なるを、今實景に對して、玄暉が詩の摹寫〔うつす〕の工なることを領解せるとなり。東坡が詩にも、謫仙此語誰解道の句あり。謫仙は、李太白なり。此の語とは、太白が峨眉山月の詩を指ていふ。謫仙が峨眉山月の詩の意を、誰か領解せんといふことなり。東坡が意も、實景に對せざれば、太白の詩の妙處を領解しがたしとなり。張籍が詩に、人の凉州を取ることを解道する無しといへるも、邊將の中に、凉州を取べきことといふ義を領解したる人なしとなり。唐詩に悲を解す、愁を解すといへるは、悲愁の字に意義あり。解の字は、知るといふ意にて、悲を解せず、愁を解せずといい

ふは、悲を知らず、愁を知らずといふことなり。解道は、解悲解愁と同からず。解の字にばかり意義ありて、道の字は只附けたる者なり。凡俗語に此類多し。

○醫書に切脉の字あり。醫家の輩、脉を切にすと讀むは誤なり。脉を切すと讀べし。切は、按也と註して、按はおすと譯す。脉を切すといふは、脉を診ふには、指にて脉處を按すなり。脉を切にすと讀めば、迫切切近の意の様になるなり。僅ににといふてにをはを附たるばかりにて、字義を失ふに至る。是倭語の體なり。故に倭語は、てにをはに意を注るを要とす。

○方書に膏藥を煉る法に、下火上火といふことあり。火をくだす、火をあぐると讀む、是誤なり。火よりをろす、火にのぼすと讀べし。膏藥を煉るには、鍋を幾度もをろしつ、かけつすることあるなり。

○方書に酒浸浸酒の字あり。古來の讀に、酒浸をも浸酒をも、倶に酒にひたすと讀む。是字法を知らざるなり。酒浸と浸酒と、其事同からざる故に、字を下すことかくの如く異なり。是字法なり。酒浸とは、凡藥を製するに、酒に浸すことあり、酒にて洗ふことあり、酒にて煑ることあり、酒にて蒸すことあり。此等の製法を書するに、文法にて酒の字皆上に在り。酒浸、酒洗、酒煑、酒蒸と書す。酢浸、酢洗、酢煑、米泔浸、米泔洗の如き、皆此類なり。水煎、酒煎も、水にて煎じ、酒にて煎ずるといふ義にて、字法是同じ。浸酒は、藥を酒に浸て、其藥を捨て、酒を用ることあるに、浸酒と書す。然れば酒浸をば、酒にて浸すと讀み、浸酒をば、浸せる酒と讀べきなり。藥を火にて燒て、其灰を用るに、燒灰と書す、燒たる灰といふことなり。藥に水をかけ、或は酒をかけて、灰湯をたるる如く漉過〔こす〕して、其汁其酒を用るに、淋汁〔たれたるしる〕、淋酒〔たれたるさけ〕と書す。皆浸酒と同字法なり。されば凡文には、篇法、章法、句法、字法とて、四法あり。是を知らざれば、文を作ることあたはず。文を作るのみにあらず、書を讀むにも、是を知らざれば、文義に通ずることあたはず。

○説文に从某某聲といふ語あり。形聲の字に、必此註あり。説文の語なる故に、凡字書に往往これを引く。从は、古の從の字なり。俗儒某某の聲に从ふと讀むは誤なり。某に从ふ某の聲と讀べし。此註の意は、凡字を作るに、六書とて六つの法あり。其第六を形聲といふ。又諧聲といふ。形聲とは、二字を合せて一字と成す時、一字は形を主り、一字は聲を生ず。たとへば江河の字の如き、水旁に工可を附たり。水は形なり。工可は聲なり。されば江の字を説くには、水に从ふ工の聲といひ、河の字を説くには、水に从ふ可の聲といふ。餘は推て知べし。

○爲某所云云といふ言を、爲の字をためと讀て、某のために云云せらると讀むは誤なり。爲の字去聲ならば、ためにと讀べし。此爲の字は字の如く平聲なり。爲所の二字を用るは、某の云云する所となるといふ意にて、爲所の二字を合せて、らるるといふ義なり。故に爲某所云云といふ言をば、某に云云せらると讀べきなり。或は某の云云する所となる、某の云云する所たりなどと讀て好き處もあり。上下の文を詳にして、宜きに隨ふべし。又爲の字ばかりありて、所の字なき處あり。論語の不爲酒困是なり。酒に困せられずと讀べきを、俗儒酒のみだれをなさずと讀むは誤なり。所の字なけれども、有る意にて、爲の字ばかりにも、らるるといふ意あり。又所の字ありてもなくても、爲某といふ下に、之の字入たる處もあり。かくの如く字法一様ならざれども、爲の字所の字に、皆らるるといふ意ある故に、其義は同きなり。爲の字去聲にあらざること、是を以て知べし。

○同異の字上に在るを、下より返りて讀むとき、某同じ、某異なりと讀むは非なり。かくの如くなれば、同異の字下に在る處と分別なし。上に在る處をば、某を同くす、某を異にすと讀べし。又禮記に降等の字あり。しなくだると讀むは非なり。音にて降等と讀べし。凡字は、上に在ると下に在るとにて、其義易はるなり。倭讀をする者、必これを分別すべし。俗儒字法を知らず、混同して一様に讀む故に、人を誤らしむること多し。

○凡文章には必助語辭あり。之乎者也矣焉哉の如き、其類甚多し。古人は助字を用るに活法ありて一定せず。且今の七字を以て言ふに、之の字は、これと讀み、のと讀むこと常なり。毛詩に亦孔將なり、亦孔嘉し、亦孔休しといへる、此之の字意義なし、衍文の如し。如何讀べきや。楚辭に余既に蘭を九畹に滋す、又蕙を

百畝に樹うとある、此等の之の字は、於の字の意なり。高唐の賦に巨石溺溺として瀺灂たり、洪波淫淫として溶瀜たりとある、此等の之の字は、以の字の意なり。雲興て聲霈霈たり、神女の賦に、墀を拂て聲珊珊たりとある、此等の之の字は只語助の詞にて、少も意義なし、兮の字の如し。詞賦の中に此類多し。箇樣の處に至ては、常の如くこれとも讀まれず、のとも讀まれず。次に乎の字は、多くは疑ふ詞に用て、やと讀み、かと讀む。又歎ずる詞にて、かなと讀むこと常なり。又句中に在て、於の字の如くなる處あり。然るを莊子に、生有り、死有り、出有り、入有りといへるは、句中に在て、何の意義も無し。又燕王喜て樂閒に謝する書に、寡人、不肖なりと雖も、未だ殷紂が亂の如くならず。君意を得ずと雖も、未だ商容箕子が累の如くならずといへるは、句末に在て、何の意義も無し。此等の乎の字をば如何讀んや。次に者の字は、ものと讀み、はと讀むこと常なり。古者今者といふが如きは、者の字皆助字にて、意義なし。古は今はといふ意にはあらず。此類猶多し。次に也の字は、なりと讀こと常なり。檀弓に伋が妻爲る者は、是白が母爲り、伋が妻爲らざる者は、是白が母爲らずとある、此也の字は、之の字の如し。然れども人名の下に、也の字を附ることは、古文に其例多ければ、此類は猶怪むに足らずともいふべし。毛詩に忘る可から俾むといひ、直人、心を秉ること塞淵なるに匪ずといへる、此等の也の字如何讀んや。莊子に胡蝶胥ひ化して蟲と爲るとある、此也の字は何の意義ぞや。只衍文と見ゆ。然れども是衍文にあらず。古書に此類多し。次に矣の字は、古來倭訓なし。只句末に在て、語の絶る處にこれを置こと常なり。然るを論語に、巧言令色仁鮮しといへるは、矣の字句中に在て、語の絶る詞にあらず。次に焉の字は、或はこれと讀み、或はここにと讀むこと多し。又或は句中に在り、或は句末に在て、矣の字也の字の如く、何の意義も無く用たる處あり。禮記に故に先王之が爲に中を立て節を制すとあり。莊子に數の其閒に存する有りとあるは、焉の字衍文の如し。楚辭に椒丘に馳て且止息す。乃ち遂にして殃に逢ふとある。此等の焉の字、皆常例に非ず。次に哉の字は、歎ずる詞にて、かなと讀み、疑ふ詞にて、やと讀むこと常なり。然るを莊子に、世之を貴ぶと雖もといひ、國語に余靦然として人面なりと雖もといひ、楊子雲が解嘲に、其人の膽智なると雖もといへる、此等の哉の字は、歎ずる詞にもあらず、疑ふ詞にもあらず、只助字なり。倭語に如何讀べきや。古人の文、拘はらざることかくの如し。他の助字も、此例を以て推て知べし。先賢の言に、古人、活心を以て活書を看るといへり。今人も書を看るには、必活眼を具すべきなり。活眼にあらざれば、古人の文に活法あるをば、看得ることなし。徒に時師の讀法を守て、變を知らざるは、柱に膠して瑟を調るといふ者なり。近時山崎氏の徒、文章を解せず、而の字をてと讀み、則の字をればと讀むを定法として、而の字あれば、義理を問はず、必てと讀み、則の字あれば、義理を問はず、必ればと讀む。而の字則の字を上の句に屬して讀む。是句讀を知らざるなり。是に由て而の字なき處にては、死すれどもてといふてにをはを附けず。則の字なき處にては、死すれどもればといふてにをはを附けず。卒に大に文義を害して、自誤るのみならず、後學を誤らしむ。固陋の至り笑ふべく痛むべきこと、是より甚きはなし。故に學者は文法を曉るを務とすべし。文法を曉らざれば、萬卷の書を讀ても、古人の旨を得ることなし。山崎氏の徒の如きは、一生を盡すとも、古書を讀得ることあるまじきなり。淺ましき事なり。

讀書法

學問は書を讀むより始まる。讀書の法二つあり。一つには華音の讀、二つには倭語の讀なり。華音とは今の唐音なり。華音の讀とは、中華の人の如く、唐音にて、上より下へ順直に讀くだすなり。倭語の讀とは、倭音倭訓を用て、上下顚倒して讀むなり。此二法偏廢すべからず。學者先華音の讀を習て、次に倭語の讀を習ふべし。其故は、書を讀む者は、記憶を本とす。記憶とは、おぼゆることなり。萬卷の書を讀ても、記憶せざれば、用に立たず。されば中華の學者は、書を讀ては、必誦を成すなり。誦とは、そらよみなり。誦を成すといふは、其文句をそらにいふことなり。必誦を成すことは、何の爲ぞといふに、徒に談論〔ものがたり〕を助け、援引〔ひく〕に便せん爲にあらず。誦を成すにあらざれば、其文義に通ずること

難き故なり。倭語の讀にても、誦をば成すべけれども、用に立たざること五つあり。一つには倭音にて誦すれば、字音混同す。二つには倭訓にて誦すれば、字義混同す。三つには顚倒の讀にて、句法字法皆失す。四つには助語辭皆遺漏す。五つには句讀明ならず。此五害ある故に、辛苦して諳んじ得ても、僅に談論の助となるのみにて、援引するにもおぼつかなく、増て文義に通ずることは叶ひがたきなり。華音にて讀めば、誦を成すことも易く、右の五害も無く、援引するに便利にて、文義に通ずることも難からず。釋氏の徒、佛經を誦するは、倭音なれども、顚倒の讀をなさず。音ばかりにて順下に讀む故に、其文句を全く諳んじて、一字の遺漏も無きなり。然れども倭音には四聲の別ちなく、字音多く混同する故に、諳誦するところ錯誤しやすし。故に誦を成さんとおもはば、華音を習ふにしくはなし。華音に習熟すれば、字音分明にして、錯誤少し。是其益なり。次に倭語の讀を習ふべしといふは、吾國の人は、音にて順に讀みくだしては、其文句を記憶するばかりにて、其義を解することあたはず。されば華音に通じたる上にて、又倭讀を習ふべきなり。然るに華音の讀は、字音を正くし、句讀を明にするのみにて、外に子細なし。倭讀は古今諸家の法各別にして、互に得失あり。何れを是とし、何れを非とすべくもあらねば、古今を斟酌し、諸家を參考〔かんがへあはす〕して、其善を擇てこれを用ふべきなり。今其大法を擧て、初學に示すこと左の如し。

○讀書の法は、先句讀を明にすべし。句讀明ならざれば、文義通じがたし。句讀とは、句きりなり。語の絶る處を句といふ。語は絶ざれども、文の屬の長き處は、其中のきりてよき處にて、幾處もきりて讀むを、讀といふ。讀は去聲、音豆、倭音とうなり。中華の人は、此句讀ばかりにて、文義を解する故に、童子などの師に就て書を讀み、文字を學ぶをば、句讀を受く、句讀を授かるといふ。文章の義理、句讀によりてかはる故に、句讀を緊要とするなり。吾國の人は、倭語を用て、顚倒の讀をなし、てにをはにて義理を取る故に、句讀を知らざれども、大略其義に通ずることを得るなり。是によりて、遂に句讀を忽にして、文義の差誤することを覺えず。師範と稱せらるるほどの者も、多くは此失を免れず。況や學者をや。凡文章には、篇法、章法、句法、字法といふことあり。古人の書を讀むも、今日文章を作るも、此四法を知らずしては叶はず。是を知ことも、先句讀を明にしての上の事なり。されば書を讀む者は、必先句讀に意を注くべきなり。

○文章に短句あり、長句あり。短句といふは、一字二字三字より、長句といふは、十餘字に至る。凡句の處は、一字にてもきりて讀べし。てにをはにてつなぐべからず。たとへば左傳に偃且射子鉏。中頰。殪といふが如き、偃且射子鉏、五字一句、中頰、二字一句、殪、一字一句なり。偃て且子鉏を射て頰に中て殪すと讀べからず。偃て且子鉏を射る。頰に中る。殪ると讀べし。定公の三年に、三年、二字一句、春、一字一句、二月、二字一句、辛卯、二字一句、邾子在門臺、五字一句、臨庭、二字一句、閽以缾水沃廷、六字一句、邾子望見之、五字一句、怒、一字一句、閽曰、二字讀、夷射姑旋焉、七字一句、命執之、三字一句、弗得、二字一句、滋怒、二字一句、自投于牀、四字一句、廢于鑪炭、四字一句、爛、一字一句、遂卒、二字一句、といふが如き、長短の句法を見るべし。かくの如く句をきりて讀めば、句法字法自明白にして、義理も隨て見やすし。是を以て例として、他は推て知べし。先輩の書を讀むを觀るに、多くは句讀を分たず、倭語のてにをはにてつなぎて、數句を一連となして讀む。是文法に昧き故なり。學者これを察せよ。

○顚倒の讀は、吾國の俗習なれば、俄に改がたし。只字を讀むに、倭訓に讀まずして叶はざる處を除て、其外音に讀るる限は、音に讀べし。古來の讀法は、漢語を譯して倭語となすことを貴び、漢語を取て、倭文倭歌の用とせんとする故に、人名地名の類を除ての外は、倭訓に讀るる限は、倭訓を用たる者なり。故に中華の書、此方の國字草子の如くになりて、うちききたるところは、やさしく面白き樣なれども、唯俗人の耳を悅ばしむるのみにて、中華を學ぶ者の爲には、其益少し。文章の道に志さん者は、務て此弊を除くべきなり。音にて讀むに三つの益あり。一つには吾國には言語の數少くして、一つの倭訓を數字に通用する故に、倭訓に讀ては、其字を記憶せず、記憶すれども、誤多し。音にて讀めば、直に其字を記憶す。二つには漢語は一字に多義あり。朱子大學の註に、慊は、快也、足也といひ、論語の註に、

厭は、棄絶也といへるが如き、是皆一字に二字の義を兼たり。此等の字を倭訓に讀めば、只一義に倚るなり。音に讀めば、多義を含蓄して遺さず。三つには倭語は煩瑣にして、記憶するに勞あり。音に讀めば、簡約にして誦を成しやすし。倭訓に讀むと、音に讀むと、其失得かくの如し。されば昔より倭訓に讀習はせる言にても、音に讀て聽にくからぬ處は、今改て音に讀べし。

○倭語はてにをはを以て辭を屬る。てにをはといふは、上下のつなぎなり。されば をといふべきを、にといひ、にといふべきを、をといへば、義理易る樣なること、諸のてにをは皆然なり。故に倭語は是を緊要とす。倭讀をする者は、これを忽にすべからず。但其間に一種むつかしき詞あり。云云せばといひてよきを、云云せましかばといひ、云云せじといひてよきを、云云せざらましといひ、いふべきのみといひてよきを、いふべからくのみといひ、云云のみといひてよきを、云云ならくのみといひ、云云す、又は云云せりといひてよきを、云云しけらしといひ、云云なりといひてよきを、云云ならしといふ。此等の詞、倭語にては風雅なるに似たれども、中華の書を讀むに、是を用ては、只むつかしきのみにて、學者の爲に少の益も無し。必此類の詞を除去て、一切に簡易に從ふべきなり。

○倭讀の法に、毛詩文選等には、音訓兩讀を用ることあり。音訓兩讀とは、音にて讀て、又倭訓にて讀むなり。關關たる雎鳩を、關關とやはらぎなく雎鳩のみさごと讀み、參差たる荇菜を、參差とかたたがひなる荇菜のあささと讀む類の如き是なり。此法何れの時より始まれるといふことを知らず。尤無益の事なり。是を止て、只常の如く讀べし。其故は、毛詩文選等の文にも、倭語に讀るる處あり、倭語に讀れざる處あり。鳥獸草木の名も、此方に無き者は、倭名なきこと多し。然るを一槩に倭名を施さんとするときは、牽强〔むり〕を免れず。況や地名、人名、宮殿の名の如きは、元來倭名なし、如何にして倭訓を施さんや。古來の讀に、山の名には、やまといふことを附け、水の名には、みづといふことを附け、殿の名には、とのといふことを附け、珠玉の名には、たまといふことを附たる處あり。文選に殊に多し。皆是倭名なき物に、倭訓を施さんとするによりて、蛇足〔へびのあし〕を畫けるなり。愚昧の至り、一笑に餘れり。此等の讀をば、一切に禁止すべし。

○賈誼が過秦論に、雲集響應景從の字あり。雲集は、雲の集まるが如しといふ義なり。響應は、響の聲に應ずるが如しといふ義なり。景は影と同じ。景從は、影の形に隨ふが如しといふ義なり。皆譬喩〔たとへ〕なり。古來の讀に、雲のごとくに集まり、響のごとくに應ず、景のごとくに從ふと讀む。義は差はざれども、詞むつかしくして、誦讀に不便なり。只音にて雲集響應す、景從すと讀べし。凡文の中に、此類の詞あるは、皆譬喩の詞なり。狼の顧るが如くなるを、狼顧といひ、虎の物を視るが如くなるを、虎視といひ、龍の騰驤〔のぼる〕するが如くなるを、龍驤といひ、蜂の起るが如くなるを、蜂起といひ、鼎の湯の沸くが如くなるを、鼎沸といひ、糜の沸くが如くなるを、糜沸といふ。例して知べし。凡此類皆譬喩の詞にて、名目なり。故に音に讀むにしくはなし。倭語に讀めば、名目にならず。

○未明に臥蓐の上にて食するを、蓐食といふ。常の早飯を、朝食といふ。日中に食するを、中食といふ。晩飯を夕食といふ。皆名目なり。蓐食を、しとねにはむと讀み、朝食をあしたにくらふと讀み、夕食を、ゆふべにくらふと讀む類、皆名目を失て惡し。蓐食す、朝食す、中食す、夕食すと、音に讀べし。

○朝廷にて人を叱吒〔しかる〕するを、廷叱といふ。朝廷にて人に恥辱を與るを、廷辱といふ。朝廷にて君を諫て君と爭ふを、廷爭といふ。衆人の中にて人に恥辱を與るを、衆辱といふ。皆名目なり。廷にして叱す、廷にしてはづかしむ、廷にしてあらそふ、衆はづかしむと讀む惡し。廷叱す、廷辱す、廷爭す、衆辱すと讀べし。凡二字三字連屬して、名目になりたる詞を、倭語に讀ことあるべからず。倭語に讀めば、名目の意を失ふなり。必音に讀て、名目といふことを記憶すべし。釋氏の徒、佛書を讀むは、倭訓すくなく、音に讀こと多き故に、名目の類、其旨を失はず。幼學も能くこれを記憶す。儒者の書を讀むは、先輩より倭語を用るを務とする故に、華語の本旨を失ふこと甚多し。此弊を改めずしては、文理に達することあるまじきなり。

○樂記に斯須の字あり、中庸に須臾の字あり。同く暫時の義なれども、其詞既に異

なれば、音に讀て、其字を記憶するを好とす。先輩の如く、皆倭語を用て、しばらくと讀ては、斯須と須臾と、詞の異なるを別つべき様も無く、其字を記憶することも難し。音に讀むと、倭語に讀むと、其得失かくの如し。此等の例を以て、他は推て知べし。

○書を讀むは、文字を識り、義理を明めん爲なり。然れども文字を識り、義理を明めんとするに、先其文句を記憶せずしては叶はず。故に書を讀む者は、其文句を記憶することを先務とす。古人の一篇の文章を看るにも、眼全篇にゆきわたらざれば、其文の大意をだにも見ることあたはず。增て篇章句字の法の精細なる處をば、何として見得することあらんや。一首の詩は、短き物なれども、草草に看過しては、其意に通ずることあたはず、必其語句を諳んじて、反覆吟咏しての後、其意味の在るところを知ことあり。詩文すら然なり。況や一部の書を讀むに、此を看るときは、彼を忘れ、末を讀ときは、始を忘るる様にては、何を以て其大義に通ぜんや。必一部を貫て、其文を記憶して、前後を思ひあはせての上にて、事の始末も、義理の着落も見ゆべきなり。譬へば高き山の上より下を觀るが如し。一目に見わたす故に、地理の曲折、分明に見ゆるなり。書を讀む者、此意にて、始より終に至まで、一目に見わたす様にあるべきなり。然れども此目を始終にわたすといふこと、容易なることにあらず。必先其書を熟讀し、其語句を諳誦記憶して、一部の書、歴歴〔きらきら〕として胷中に在ときは、卷を開くごとに、いづくにてもあれ、我が眼は始終に及ぶなり。さて諳誦記憶することは、熟讀より得ることなり。熟讀するにあらずして、急に記憶せんとして、今日一語を記憶し、明日一句を記憶するは、速に其功を成就することあれども、速に得たることは、速に失ふものなり。只何の意も無く玩讀して、數十遍を累れば、いつとなく口に上りて、自然に其文句を諳んずるなり。かくの如くにして記憶したるは、久くなりても忘れず。是を熟讀といふ。是讀書の要法なり。此法を用んとするには、殊に古來の讀の如くなる、むつかしき倭訓、むつかしきてにをはを除去て、簡易ならん様を學ぶべきなり。簡易とは、事すくなくやすきなり。前にいへる如く、音に讀て通ずるほどの處は、倭語を用ひずして音に讀む。是簡易の法なり。凡儒生の書を讀むは、中華の文章を學て、聖人の道を明めん爲にして、倭歌倭文の用に立てんとにあらざれば、倭訓を略して、誦讀に便よく、記憶しやすきを取べきなり。

○中華の人の書を讀むといふは、書を看ることをいふなり。別に看書の字あれども、俗語なり。雅言には讀書とばかりありて、看書の字なし。此方の人は、讀書と看書とを二つに分て、讀書は讀書、看書は看書として、其事同からず。是國俗の誤なりといへども、此方の習俗にては、讀むと看ると、實に同からざることあり。其故は、倭語の讀には顚倒あり、助語を遺す。是漢語と異なり。されば口にて讀たるばかりにては、漢文の義理見えがたし。只口には倭語の讀をなすとも、目にて其文字を看て、其上下の位を分別し、助語辭までに一一に目を屬て、子細に看て、心には其句法字法の種種變化異同あることを思量〔おもひはかる〕して、中華の人の音にて順に讀くだす心になりて、漢文の條理血脉を識得せんことを要すべし。是書を看るといふ者なり。只讀むといふばかりにては、かくの如くの事なき故に、其益も少し。是倭漢讀書の同からざる處なり。

○倭讀には諸家の點ありて、互に異同あり。學者往往に其是非を爭ふ。爭ふところ或は理あれども、畢竟倭語の上の是非なれば、優劣〔まさるをとる〕するに足らず。善く學問せんとおもはん者は、深く是に泥むべからず。點はとにもかくにも讀べし。只點に目をつけず、本文に目をつけて、中華の人の讀法の如く、上より順に讀くだす意にて、其文義を尋求むべきなり。されば讀書は、點なき本を用るにしくはなし。若初學點なき本を讀ことあたはざる者は、姑點本を用ふべし。其點本は、諸家の内、何れの本も皆可なり。魚を得るまでの筌なれば、何れの點にても倭讀を習ふことは一致なり。既に其旨を得ては、點は讀む者の心に在り。其極功をいふときは、點を捨て、中華の人の心になりて、心と目とを用て、漢語の讀をするにあらざれば、眞の讀書といひがたし。是讀書の第一義なり。

倭讀要領卷中

（待續）